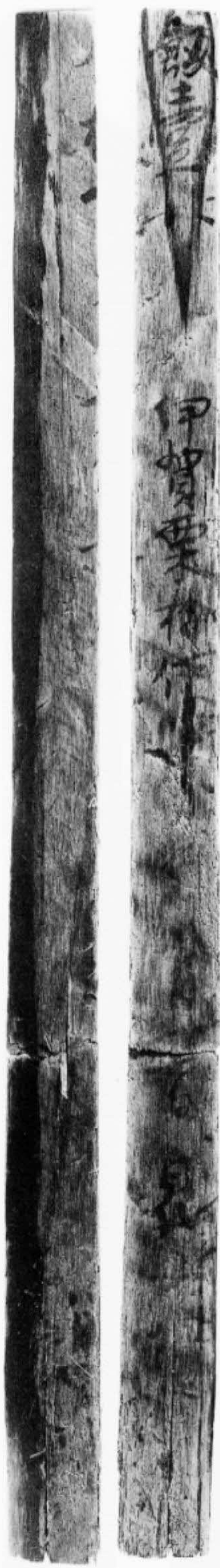


二〇〇七年十一月

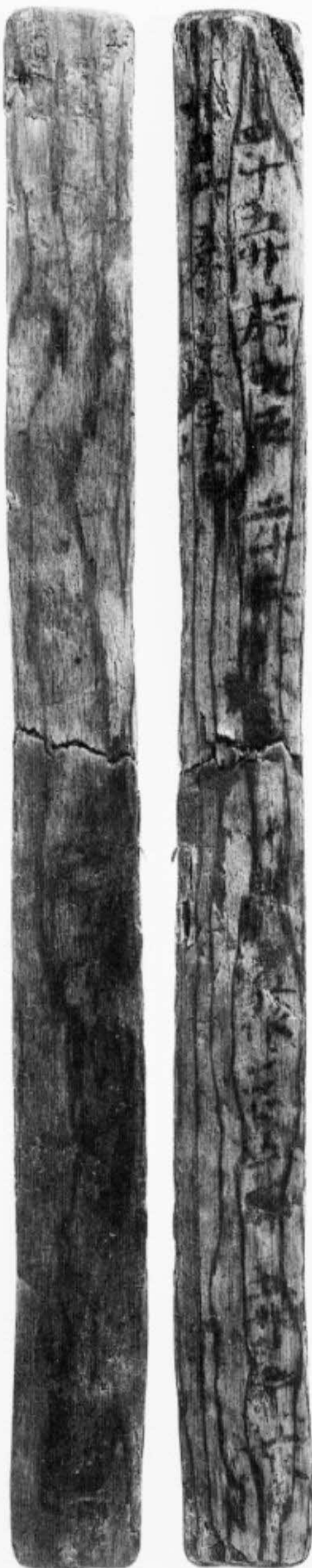
平城宮発掘調査出土木簡概報(三)

付『平城宮木簡一』補訂四

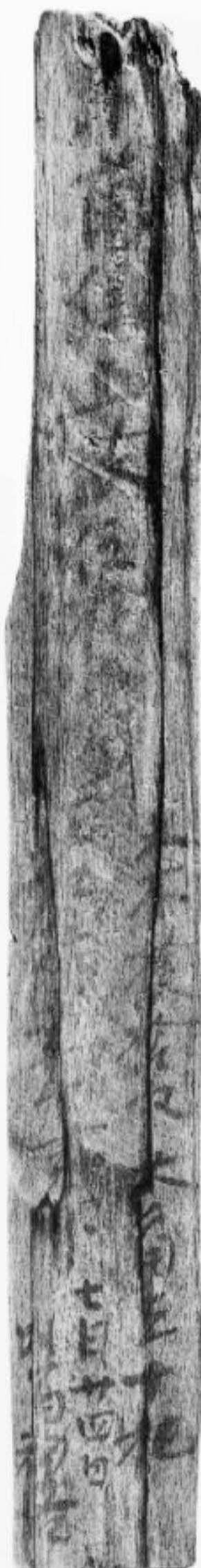
奈良文化財研究所



40



50



35



39



76



42



36



38



49



55



66



80



78



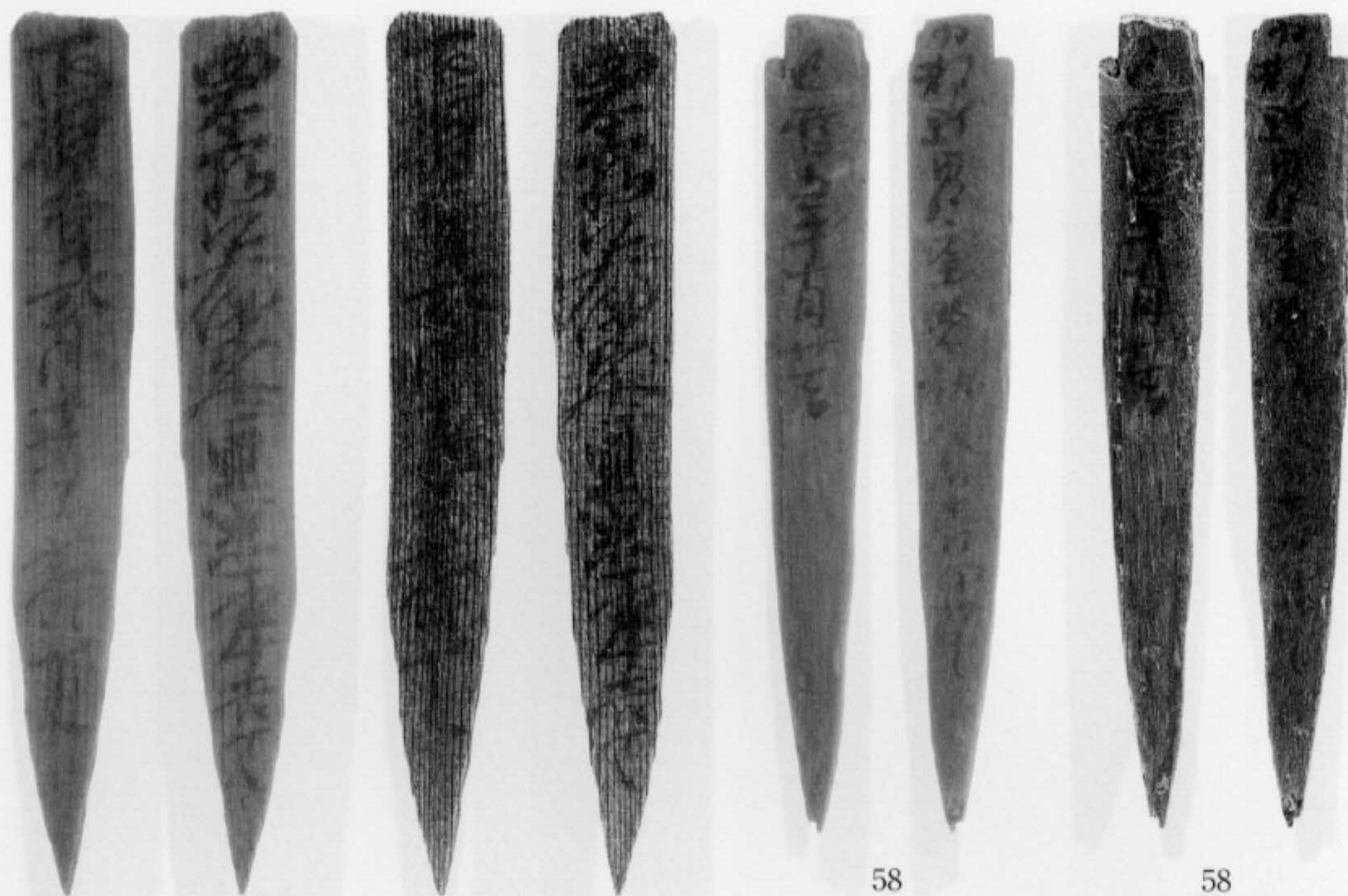
73



48



47

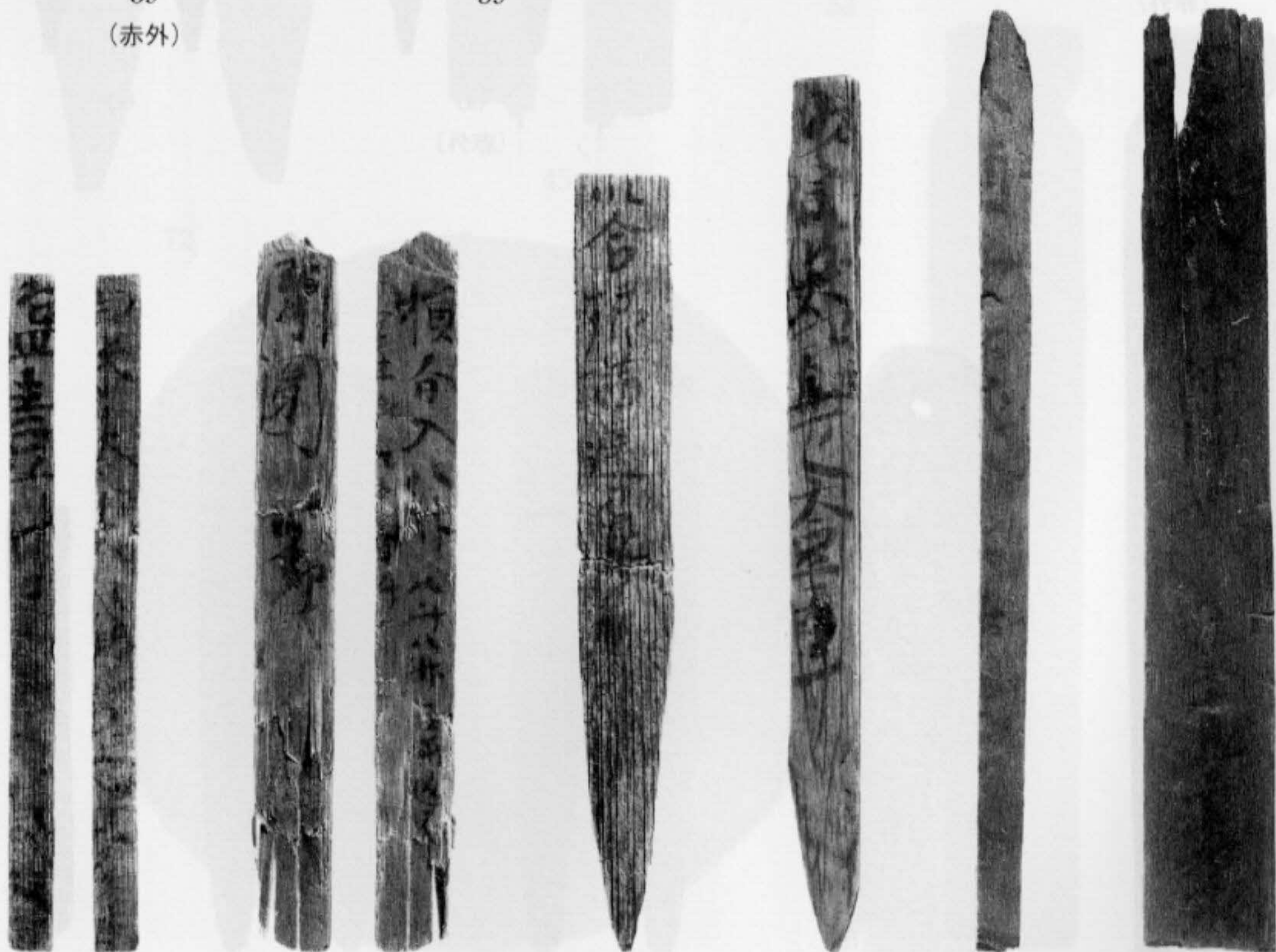


59
(赤外)

59

58
(赤外)

58



54

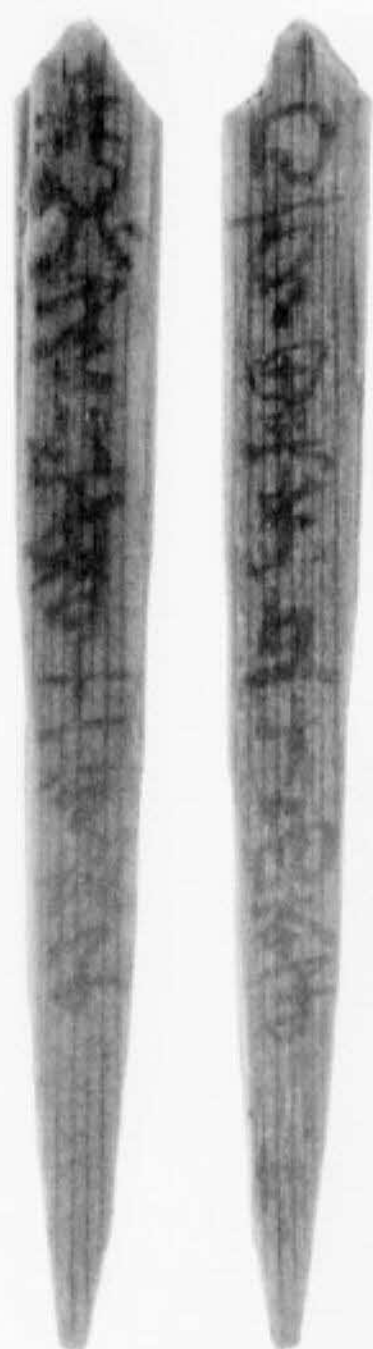
44

70

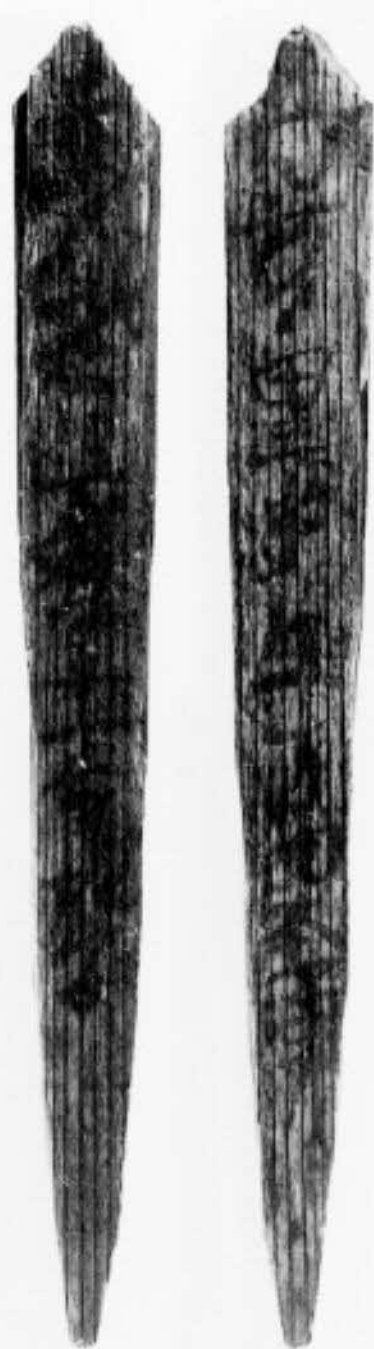
64

53

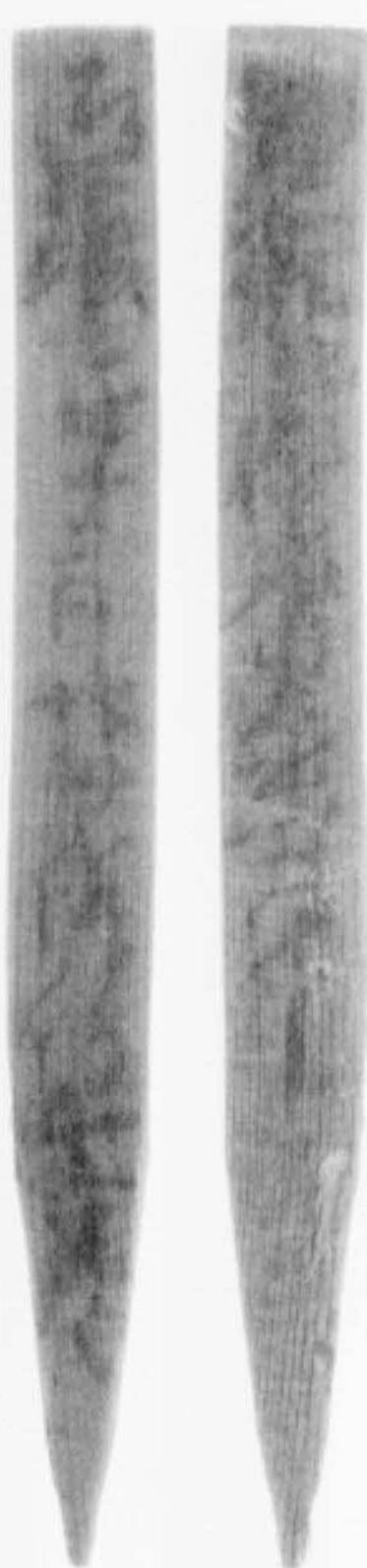
37



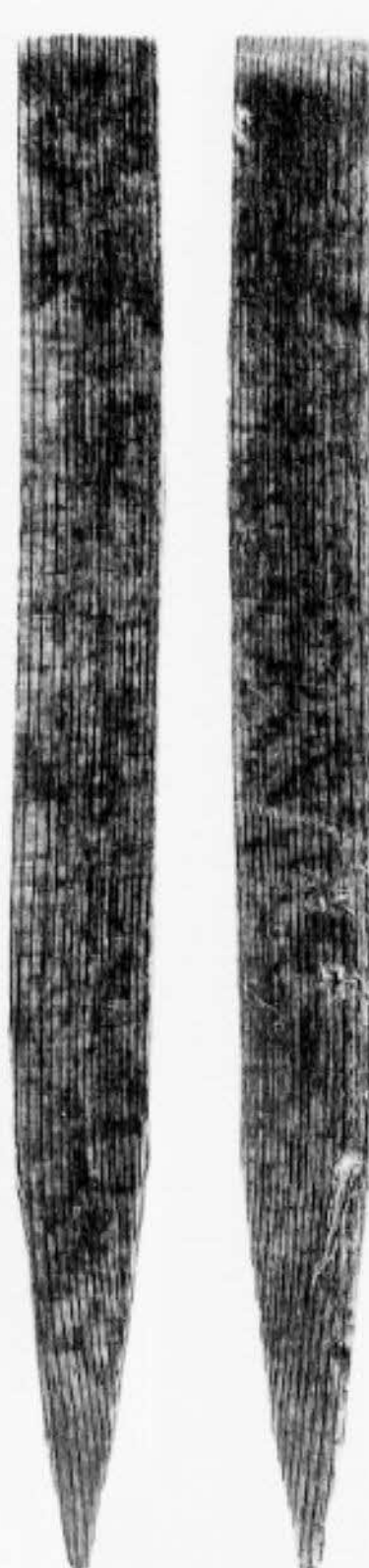
62
(赤外)



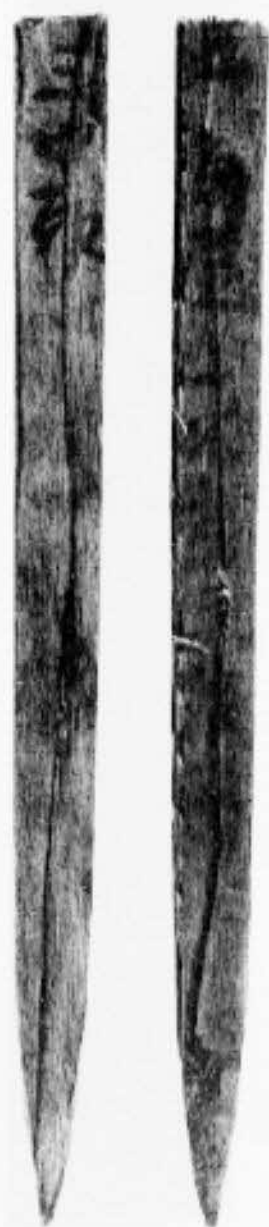
62



60
(赤外)



60



75



57



61
(赤外)

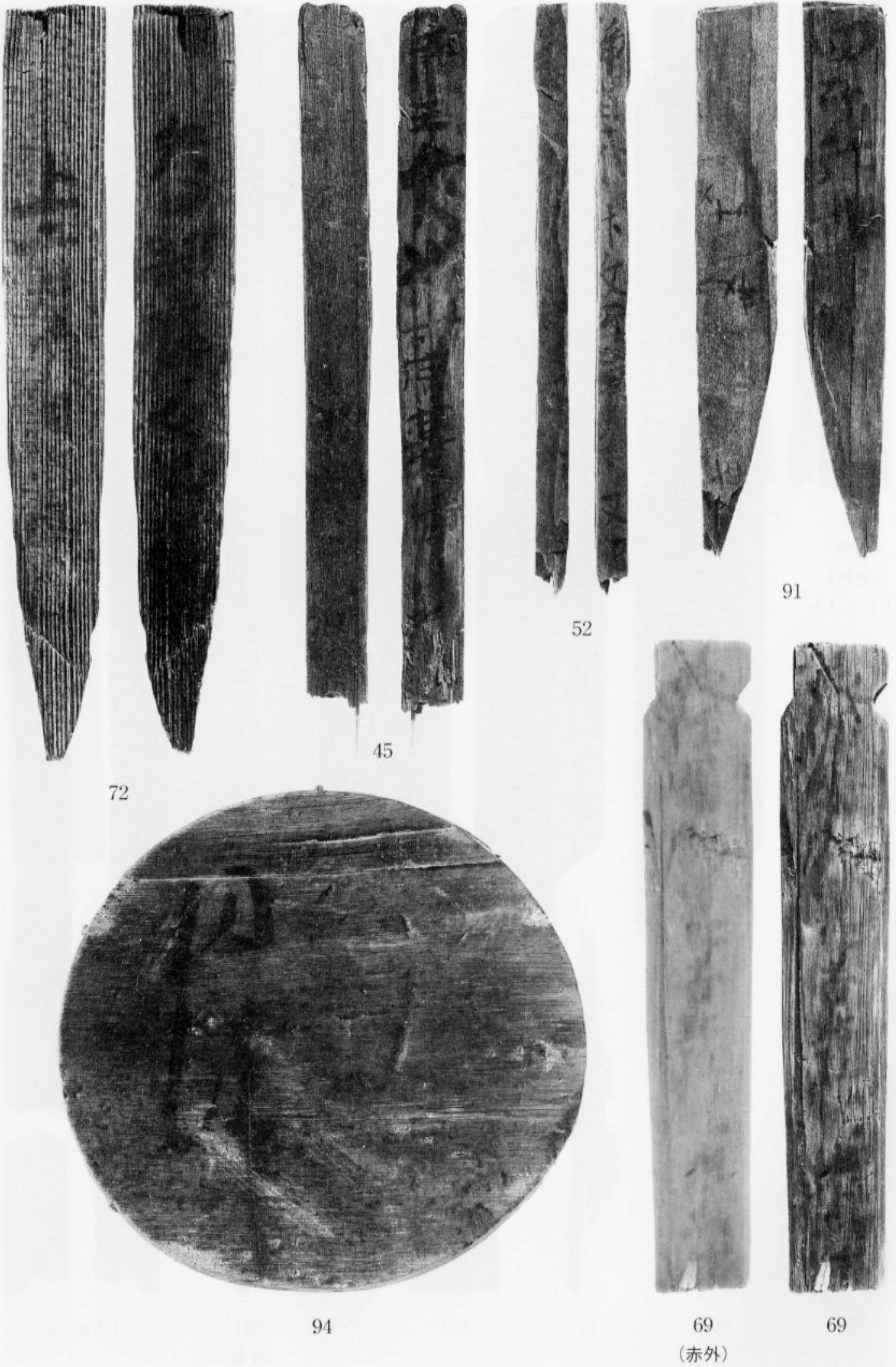


61



56

(3 : 5)





95
(部分)
(赤外)
(1:4)



41裏
(赤外)



41

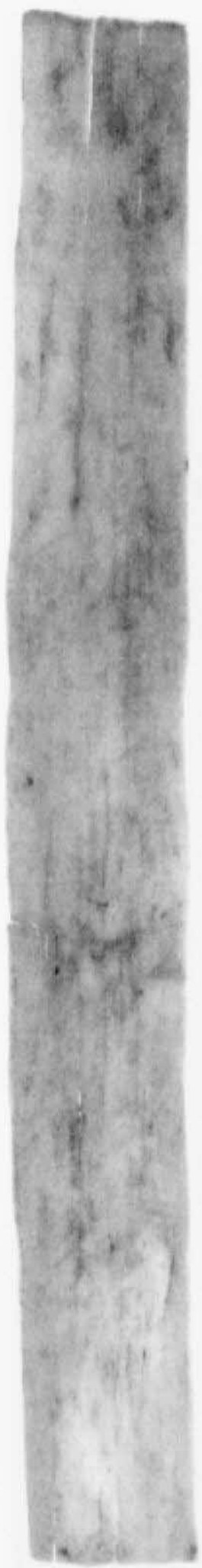


96表
(赤外)



96





43裏
(赤外)



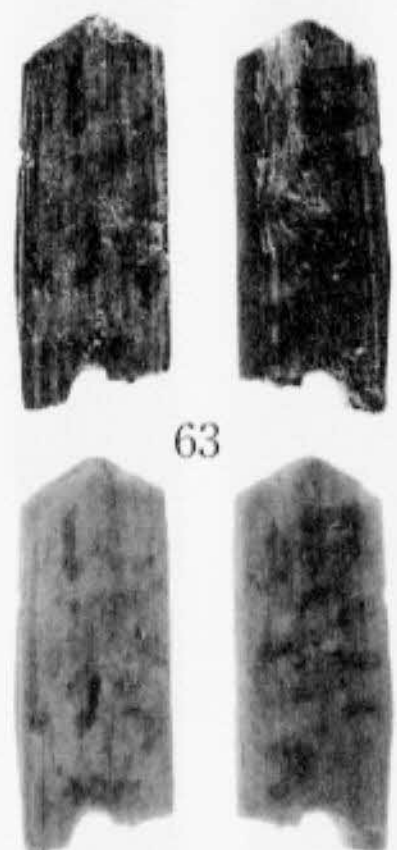
43



46

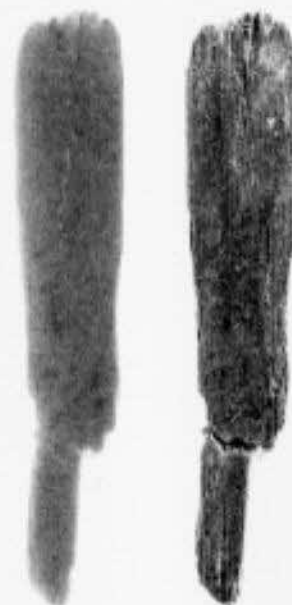


71



63

63 (赤外)



102 102
(赤外)



103



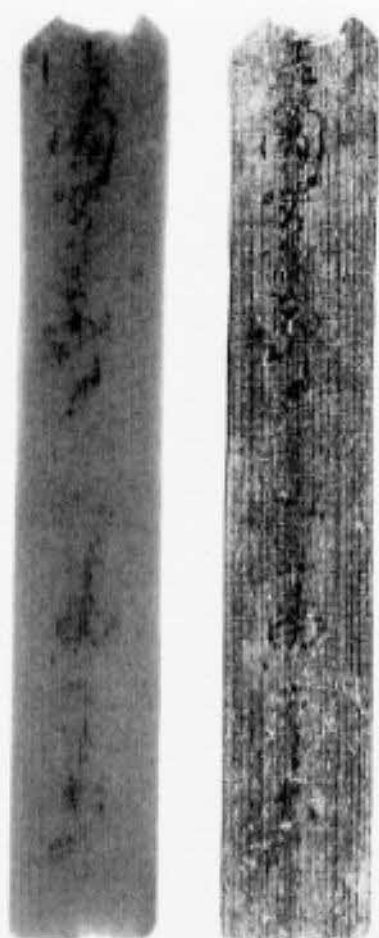
111



104



97



D (赤外) D



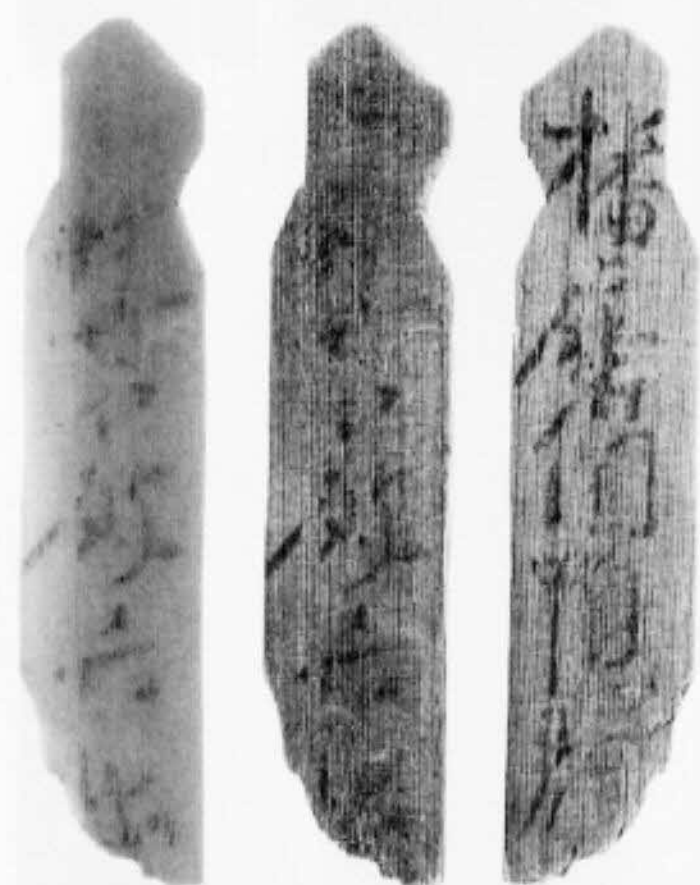
E裏
(赤外)



E



B
(1 : 2)



G裏 (赤外) G



C (赤外) C

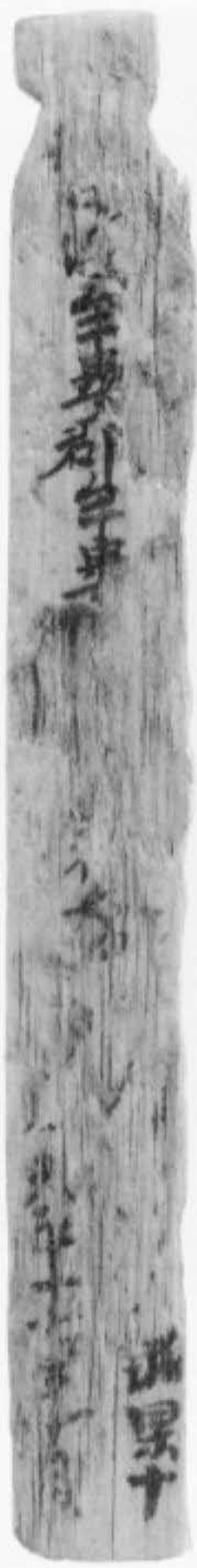


B (赤外)

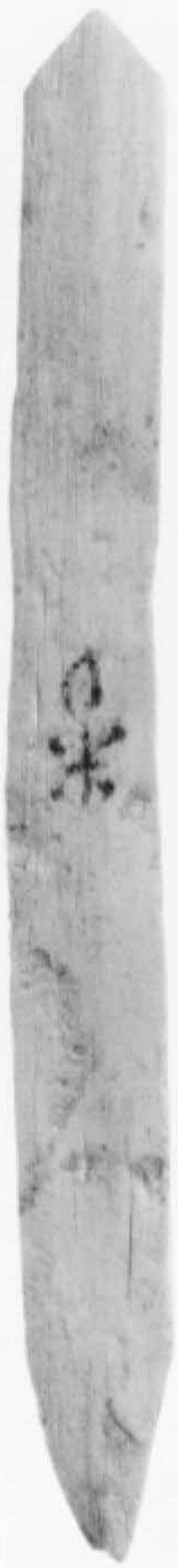
図版九 『平城宮木簡二』



402
(赤外)



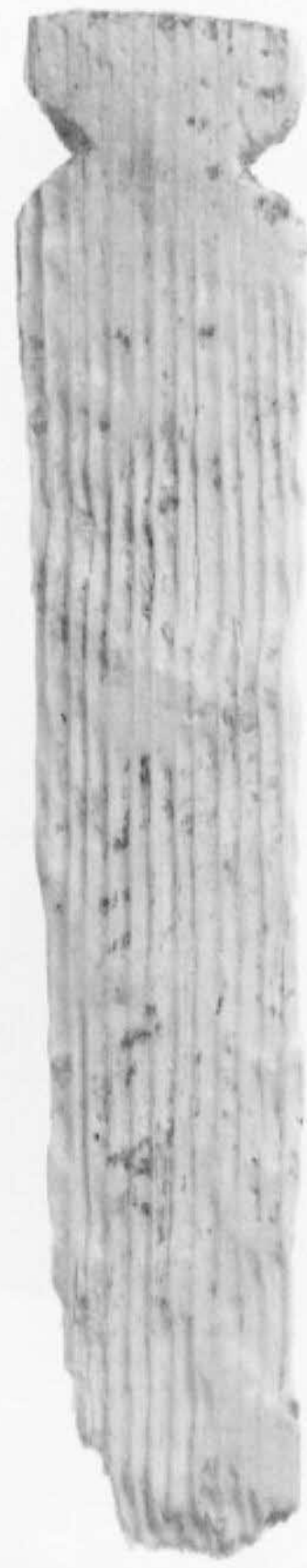
435
(赤外)



421
(赤外)



436
(赤外)



464
(赤外)



464

(1 : 2)



415+449
(赤外)

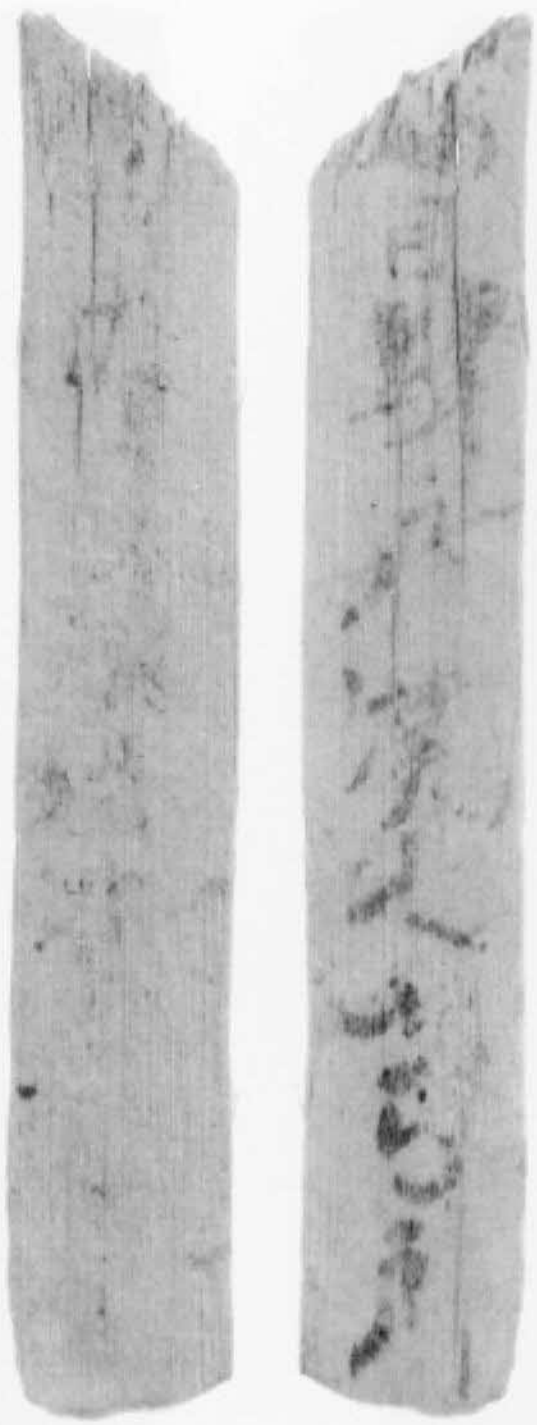


415+449





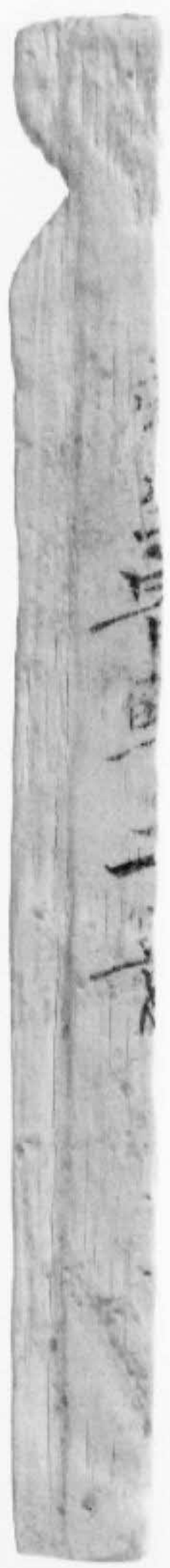
474



452



473



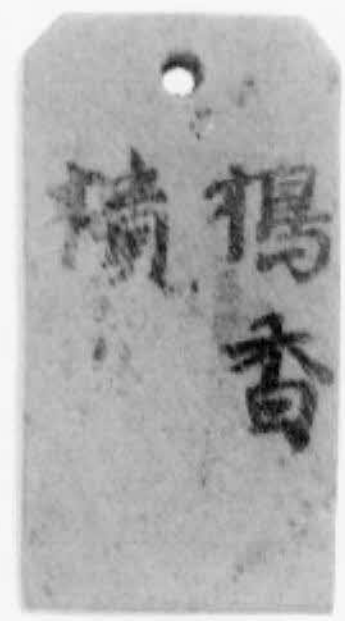
445



492



451



465
(1 : 1)

(いずれも赤外)

(3 : 5)

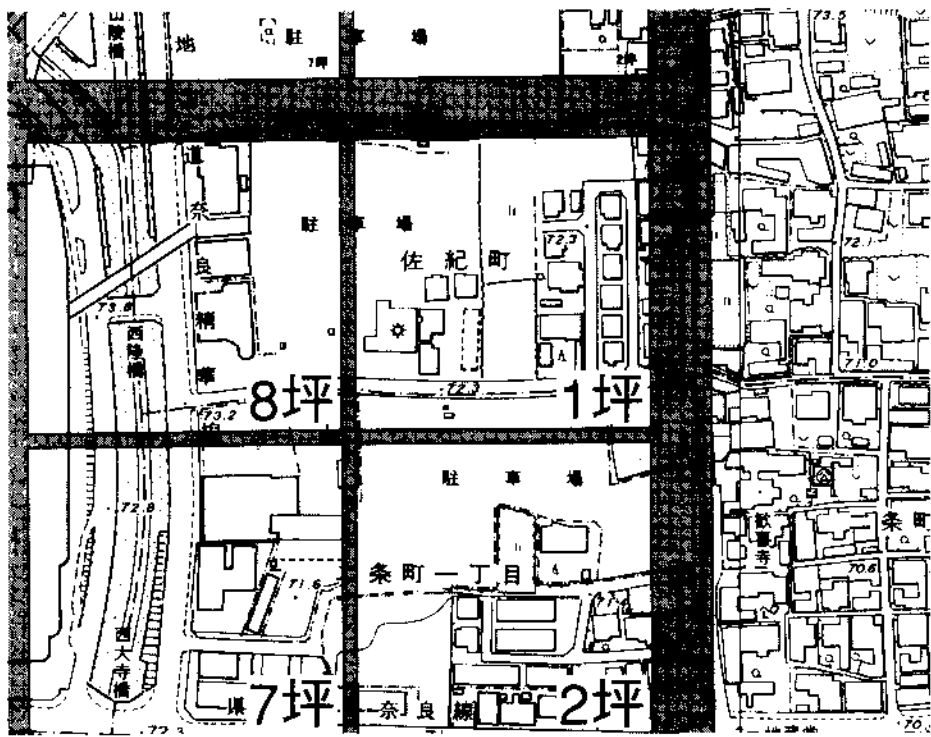


図1 第79-24次調査区位置図

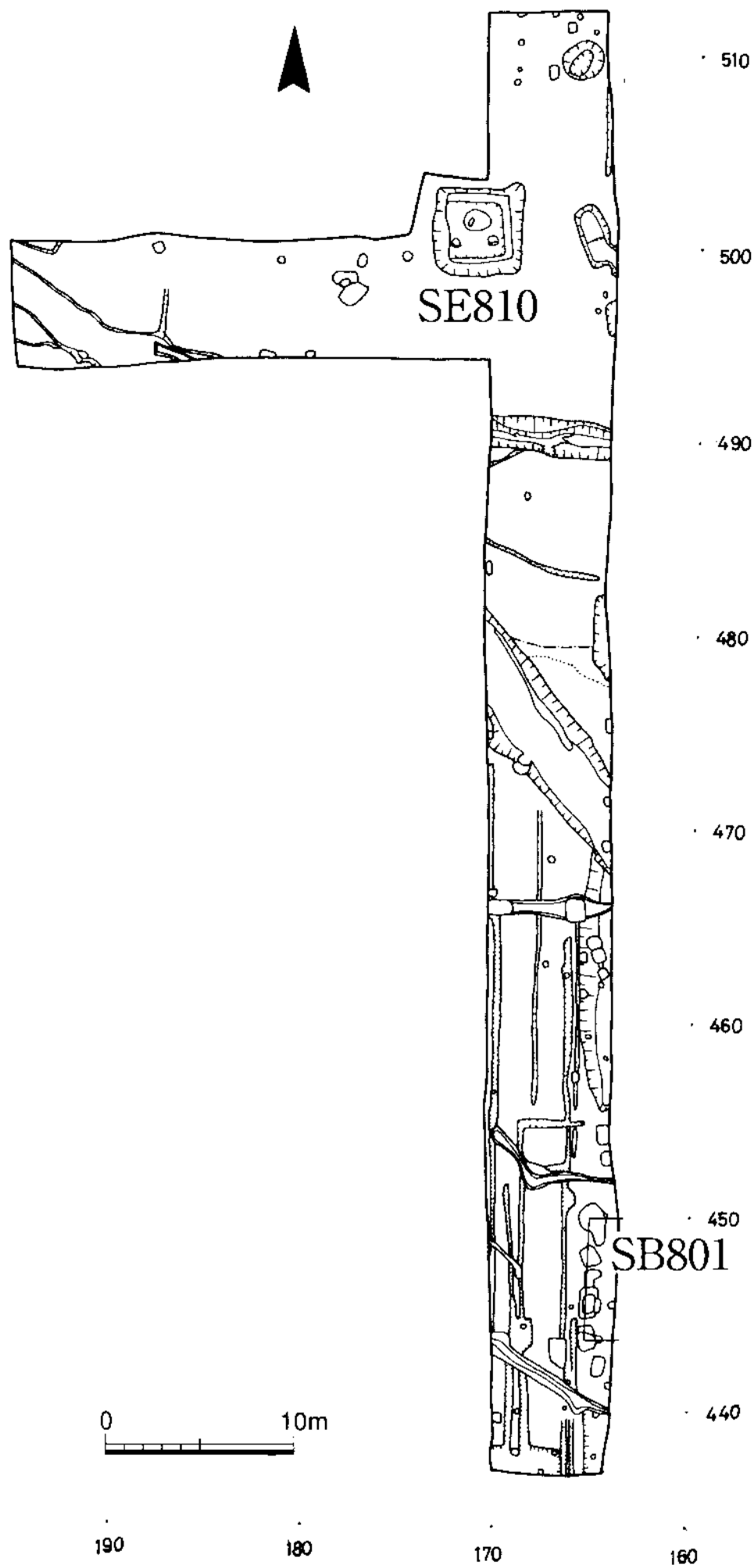


図2 第79-24次調査区遺構図

この概報には、先に公刊した『平城宮発掘調査出土木簡概報（三十七）』（二〇〇三年六月刊）以後に平城宮・京跡から出土した木簡のうち主要なもの、これまで未報告であったもの、及び『平城宮発掘調査出土木簡概報』・『平城宮木簡一』四〇一〜五三〇号のうち新たな調査によって釈文を補訂すべきことが判明したものを収録する。

以下、木簡の各地点ごとの出土状況、釈文を掲げる。

一、木簡の出土地点と状況

第七九―二四次調査（6AGA区）

（一九七二年一月〜一二月）

県営住宅建設に伴う事前調査で、調査地は右京一条二坊一坪（現奈良市佐紀町）にあたる。調査区は、六m×七五mの南北トレンチと、それに直交する六m×二五mの東西トレンチからなり、調査面積は五八五㎡である。検出した遺構は奈良時代とその前後の時期に大別される。ただこれらの区分は遺構の重複関係によるもので、時期を決める遺物は出土していない。奈良時代の主な遺構は、東西棟建物の西妻部分、溝三条、土坑三基、井戸一基である。

木簡は、東西トレンチと南北トレンチの交点付近で検出した井戸SE八一〇の下層から一点出土した。井戸は東西棟建物SB八〇一の五〇m北に位置する。井戸SE八一〇は、一辺約四mの方形の掘形をもち、検出面からの深さは二mで、井戸枠は残存しない。井戸の堆積土は大きく上(粘土層)・下二層(上から1層・2層・3層)に分かれる。上層からは平安初期の黒色土器、須恵器甕などが出土し、平城宮廃絶後しばらくして埋没したものと考えられる。下層からは木簡、墨書土器「□継」・「下」・「赤」などが出土し、上下両層から宝亀・延暦年間頃の軒平瓦(六七五五A型式など)が出土している。そのほか、奈良時代末頃の土器、「理」・「矢」・「在」銘(銘はどの瓦も一字)の刻印瓦、緑釉の火舎の脚部などが出土している。

第三三六次調査(6BGN区)

(二〇〇一年一〇月〜二〇〇二年二月)

国指定名勝旧大乘院庭園では、(財)日本ナショナル・トラストの委嘱によって復原整備に向けた資料を得るため、一九九五年から毎年継続的な発掘調査を実施している。今回の調査は、西小池の北端が想定される場所(北区)と東大池の南西に浮かぶ島(南区)で実施したもので、調査面積は計約五〇七㎡である。木簡が出土したのは北区である。

北区で検出した遺構は、西小池と、その西側において室町時代の遺構、部分的に奈良・平安時代の遺構、大乘院廃絶後の一八八三年

から一九〇〇年(明治一六〜三三)に当地にあった飛鳥小学校の遺構、奈良ホテルのテニスコートや防空壕などである。

木簡は西小池北池SG八三二一の埋立土下層から見つかった。ここからは石盤・石筆・硯・桶なども見つっている。これらの遺物は飛鳥小学校に関わるものと考えられる。木簡の中には、石盤を囲む四辺のうち下辺にあたる横枠材と考えられるものもある。

第三三八次調査(6BYS区)

(二〇〇一年一〇月)

調査地は平城京右京六条二坊一三坪の北西隅で、薬師寺寺城西辺部にあたる。西側は西二坊大路に面し、さらに西に六条条間南小路が伸びる。本調査は駐車場建設に伴う事前調査である。調査面積は約三〇㎡。整地土上面で、二条の素掘り溝を検出した。

木簡が出土したのは調査区南半で検出した東西溝SD二七九〇の堆積土最下部で、六点出土した。東西溝SD二七九〇は寺域内の排水を南北溝SD二七八五(西二坊大路東側溝あるいはこれを踏襲するもの)に流すための溝であると考えられる。溝の埋土からは他に、奈良時代から室町時代にかけての軒瓦、室町時代から江戸時代までの土器、漆器椀や灯明皿受台などの木製品が出土した。掲出の一点以外はすべて墨付きのみの断片である。

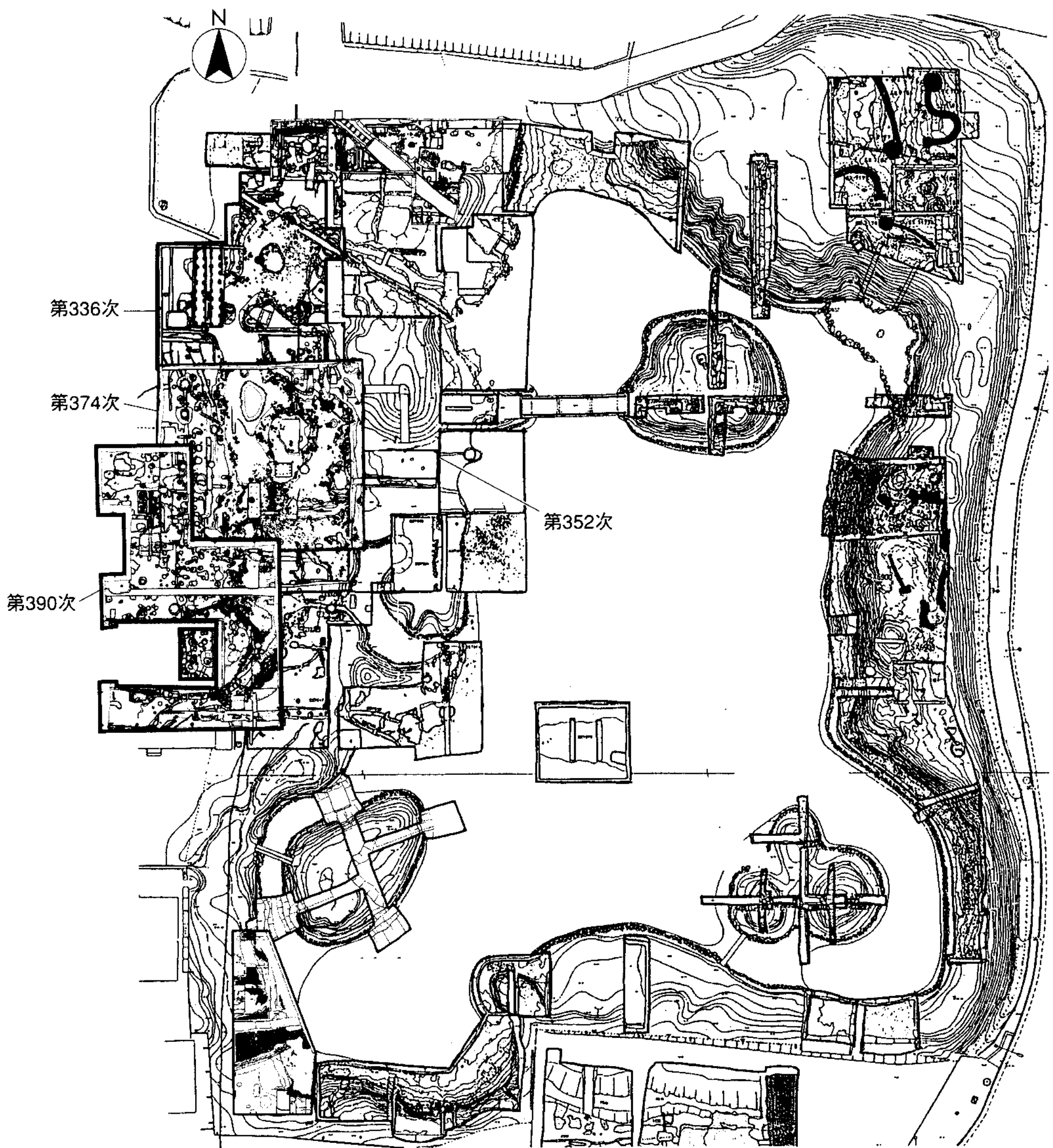


图3 旧大乘院庭園調査区位置図

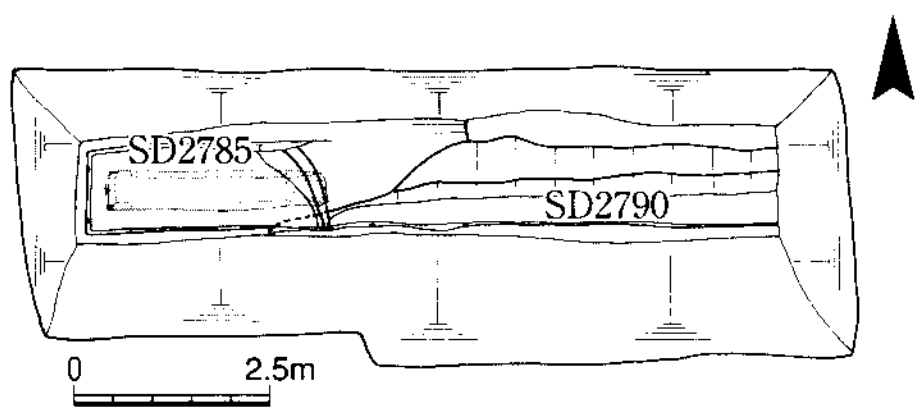


图5 第338次調査区遺構図

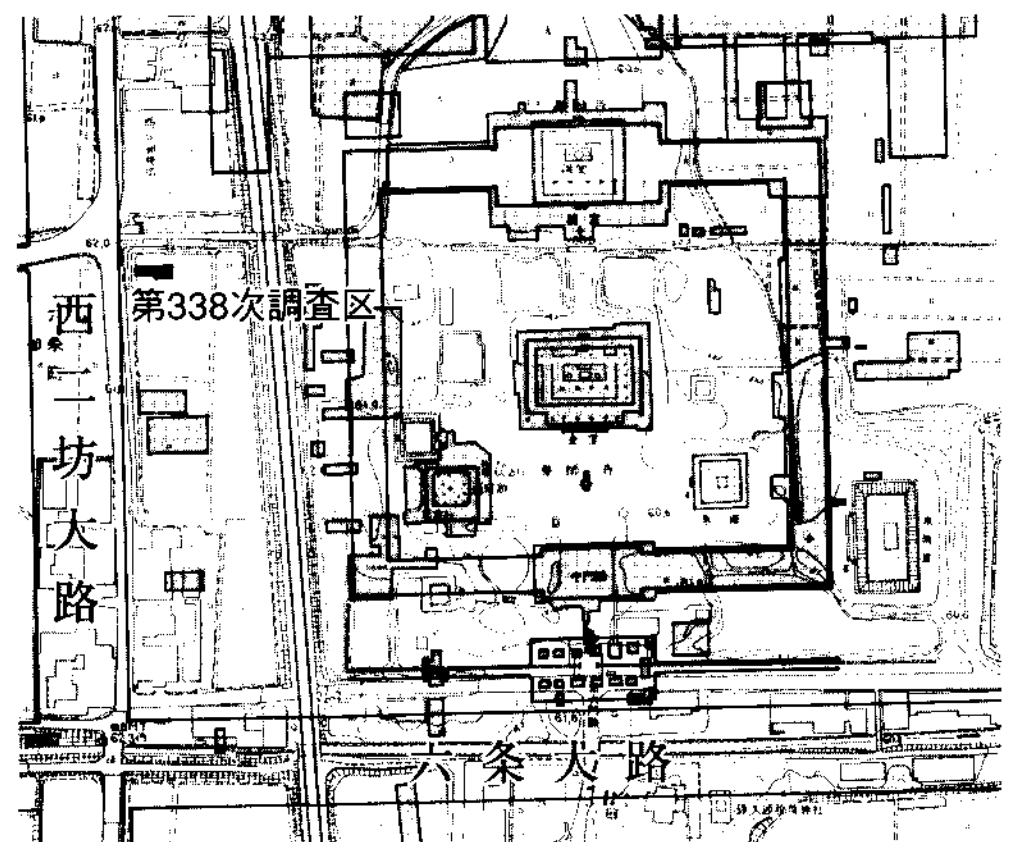


图4 第338次調査区位置図

第三五二次調査（6BGN区）

（二〇〇三年一月～三月）

今回の調査は国指定名勝旧大乘院庭園の西小池南池の想定地および東大池西岸の築山を主たる対象として実施したもので、調査面積は計二六七・五㎡である。検出した遺構は大きく西小池以前の遺構、西小池（南池）とこれにともなう遺構、西小池の埋め立て以後の遺構に区分される。

木簡は西小池の埋め立て以後の遺構である南北杭列SA七八九七の西辺に沿って検出された南北溝SD七八九八の埋土より、計六点出土した。

第三六三次調査（6BFO区）

（二〇〇三年八月～十二月）

法華寺境内防災施設改修事業に先立つ発掘調査である。調査面積は三二一㎡である。消火栓への給水管や電気の配線工事に伴うもので、幅一mほどの細長いトレンチ調査である。奈良時代・中世・近世の各時期の整地、本堂前面の東西棟建物三棟・講堂・鐘楼などの建物のそれぞれの一部を確認している。

木簡は薬師堂・横笛堂西方に設定した南北トレンチで検出した土坑SK八六五九から一〇点（うち削屑二点）が出土した。この土坑からは多くの木製品、鉄釘、寛永通宝などが出土しており、いずれも近世以降の遺物である。

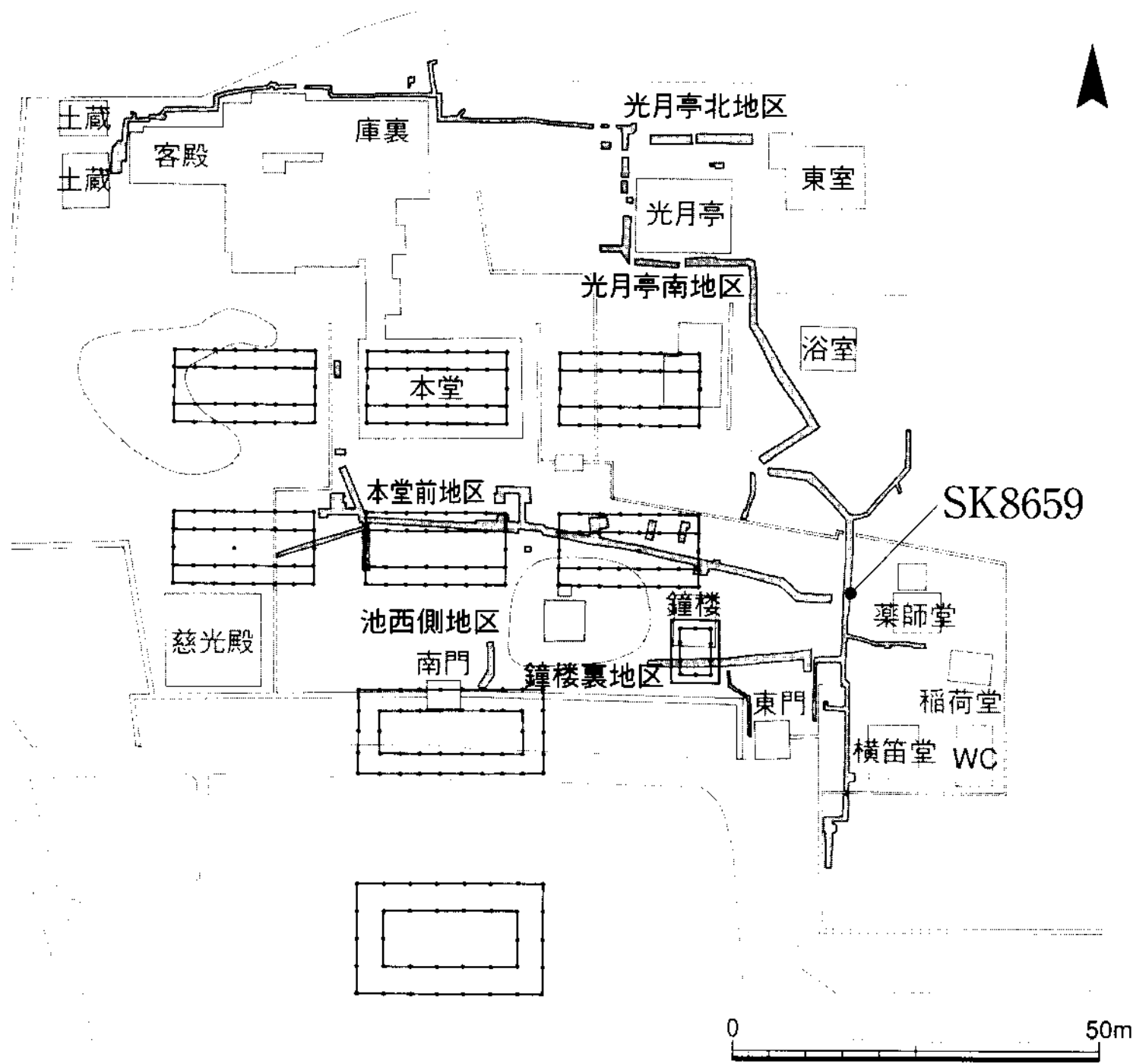


図6 第363次調査区位置図

第三七四次調査（6BGN区）

（二〇〇四年七月～一〇月）

この調査は、二〇〇三年に名勝の追加指定がなされた地区に建設

されていたJR西日本の宿泊施設「大乘苑」が解体されたことに伴い実施した発掘調査である。調査面積は北区（西小池中央部が推定される地区）約五一〇㎡、南区（東大池西南隅部）約一七〇㎡、計約六八〇㎡である。木簡が出土したのは北区である。

遺構は大きく、(1)西小池以前の遺構、(2)西小池およびこれに伴う遺構、(3)西小池埋め立て以後の遺構に分けられる。このうち(3)は池の埋め立て土、一八八三年から一九〇〇年（明治一六〜三三年）に当地にあった飛鳥小学校建設に伴う整地土、灰褐色砂質土上面で検出した遺構からなる。

木簡が出土したのは水槽SX八八三八・埋甕遺構SX八七九一である。水槽SX八八三八は漆喰製で、五〇cm四方、深さ約七〇cmをはかる。遺物は木製品・石製品などで、飛鳥小学校に関連すると考えられる遺物（将棋駒をはじめとして、鉛筆、石筆、泥面子の一種など）が多数出土している。埋甕遺構SX八七九一は二基の甕を南北に配した埋甕遺構で、甕底部には鈔屑が詰め込まれ、その上面に墨書薄板や部材片が投棄されていた。

第三八五次調査（6ACC区）

（二〇〇五年一月）

特別史跡平城宮内の西北地域（奈良市佐紀町）における個人住宅の現状変更に伴う調査。調査面積は四㎡。溝ないし苑池の一部を確認した。堆積土には中世から近世にかけての瓦、陶磁器片を含む。

木簡もその堆積土から一点出土した。

第三九〇次調査（6BGN区）

（二〇〇五年七月〜一〇月）

この調査は西小池南池を中心に設定した調査区であり、大乘院庭園におけるまとまった調査としては最後のものとなる。調査面積は五一七㎡。検出された遺構は、室町時代以前・江戸時代・近代以後の三段階に分けられる。知見として、西小池の西の池尻に排水施設が備わっており、堰によって水量を調節していたこと、東岸を狭める改作のあとが見つかったこと、西小池の西側で検出された建物SB八九九三が『大乘院四季真景図』にある「湛雪亭」に対応すると考えられることなどがあげられる。木簡が見つかったのは、江戸時代の遺構である、水桶を地中に埋めた水溜遺構SX八九八六である。この桶の底板の外周中央に墨書があった。

第四〇四・四一〇・四一五次調査（6BSD区）

（二〇〇六年五月〜十月）

平城京右京一条三坊八坪（西大寺旧境内食堂院跡推定地、現奈良市西大寺本町）において実施した、マンション建設に伴う発掘調査である。調査面積は一九〇〇㎡である。

検出した遺構は、概ね、奈良時代前半以前・奈良時代後半・平安時代以降の三期に時期区分される。このうち奈良時代後半の遺構は、

西大寺創建段階の食堂院に関わるものと推定される。主な遺構としては、東西棟の礎石建物S B九五五（『西大寺資財流記帳』（以下『資財帳』と略す）記載の「檜皮殿」に相当すると推定）、その北に桁行七間・梁間四間と考えられる東西棟礎石建物S B九六〇（『資財帳』記載の「大炊殿」に相当すると推定）、東西棟礎石建物S B九五五とS B九六〇との中央間をつなぐ南北方向の礎石建ちの軒廊S C九六五、S B九六〇の北で検出された掘立柱建物S B九七〇、礎石建ちの軒廊S C九六五の東に位置する井戸S E九五〇とその覆屋と考えられる南北棟礎石建物（桁行三間・梁行二間）S B九五一などがあり、これらの建物群の東からは埋甕列S X九三〇が検出されている。隣接する奈良市による西大寺旧境内第一五次調査で検出されたものとあわせると、埋甕は少なくとも八〇基並んでいたと推定される。また、本調査区の南で行われた奈良市による西大寺旧境内第一二次調査では、食堂本体と推定される大型柱穴七基を検出している。

木簡は奈良時代後半の遺構である井戸（S E九五〇）から見つかった。井戸は井籠組。井戸の平面は方形で、内法は一辺約二・三m。遺構検出面からの深さは約二・八m。井戸枠は横板材五段分（高さ約二・三m）が残存し、上部構造は抜き取られていたが、井戸の内側から井戸枠とみられる木材が出土しており、最低六段以上存在したとみられる。井戸底に浄水用として直径三cm前後の円礫を敷き詰め、その上に木炭を敷く。

掘形は東西に長い楕円形で、大きさは南北五・四m、東西約六・六mである。井戸本体は掘形の西寄りに設置されており、底部は井戸枠がおさまるほどの幅しかない。掘形の埋土は粘質土で、最上部は黄色土を層状に固め、丁寧に埋められている。また、黄色土上面には凝灰岩が残存し、他にも抜き痕跡とみられる穴を確認していることから、井戸の周囲には石が据えられていた可能性がある。

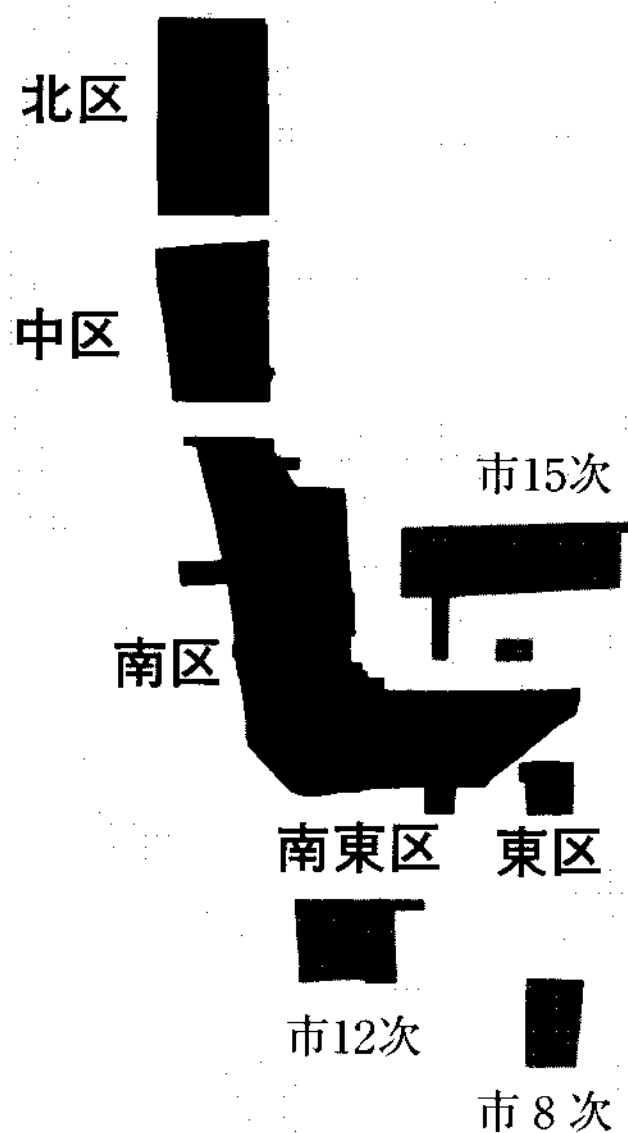


図7 第404・410・415次調査区位置図

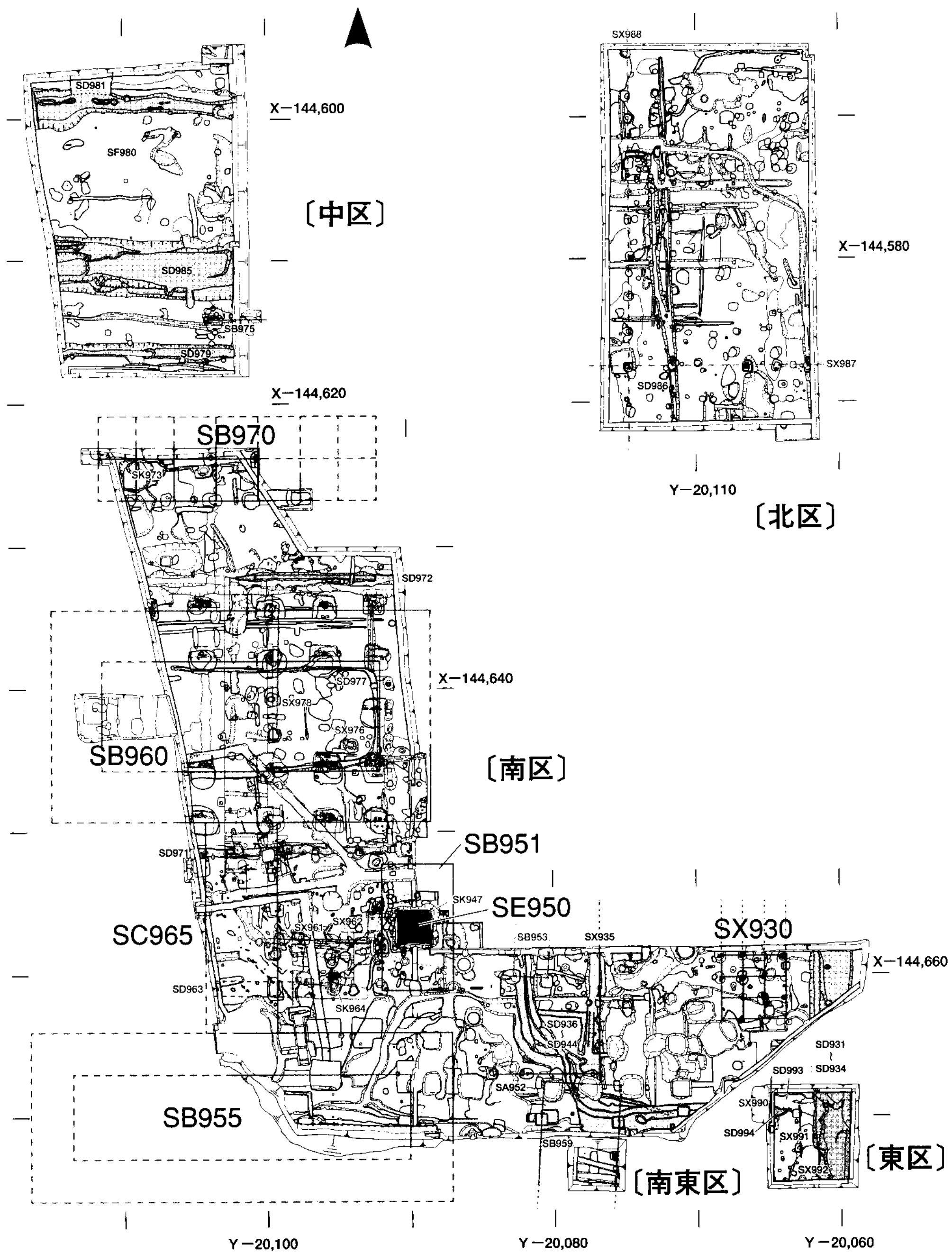


図8 第404・410・415次調査区遺構図 1:500

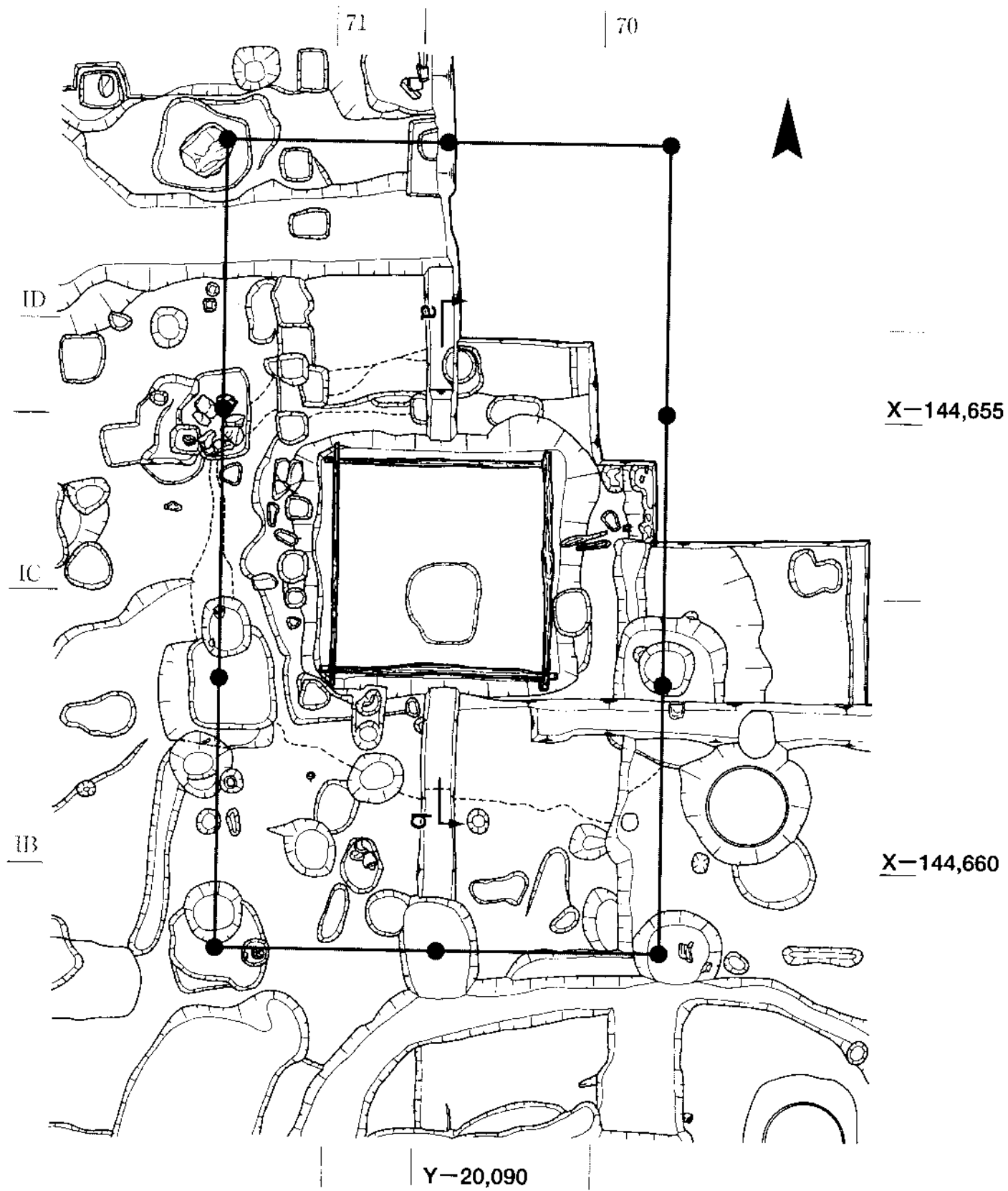


图9 SE950·SB951遺構平面図 1:120

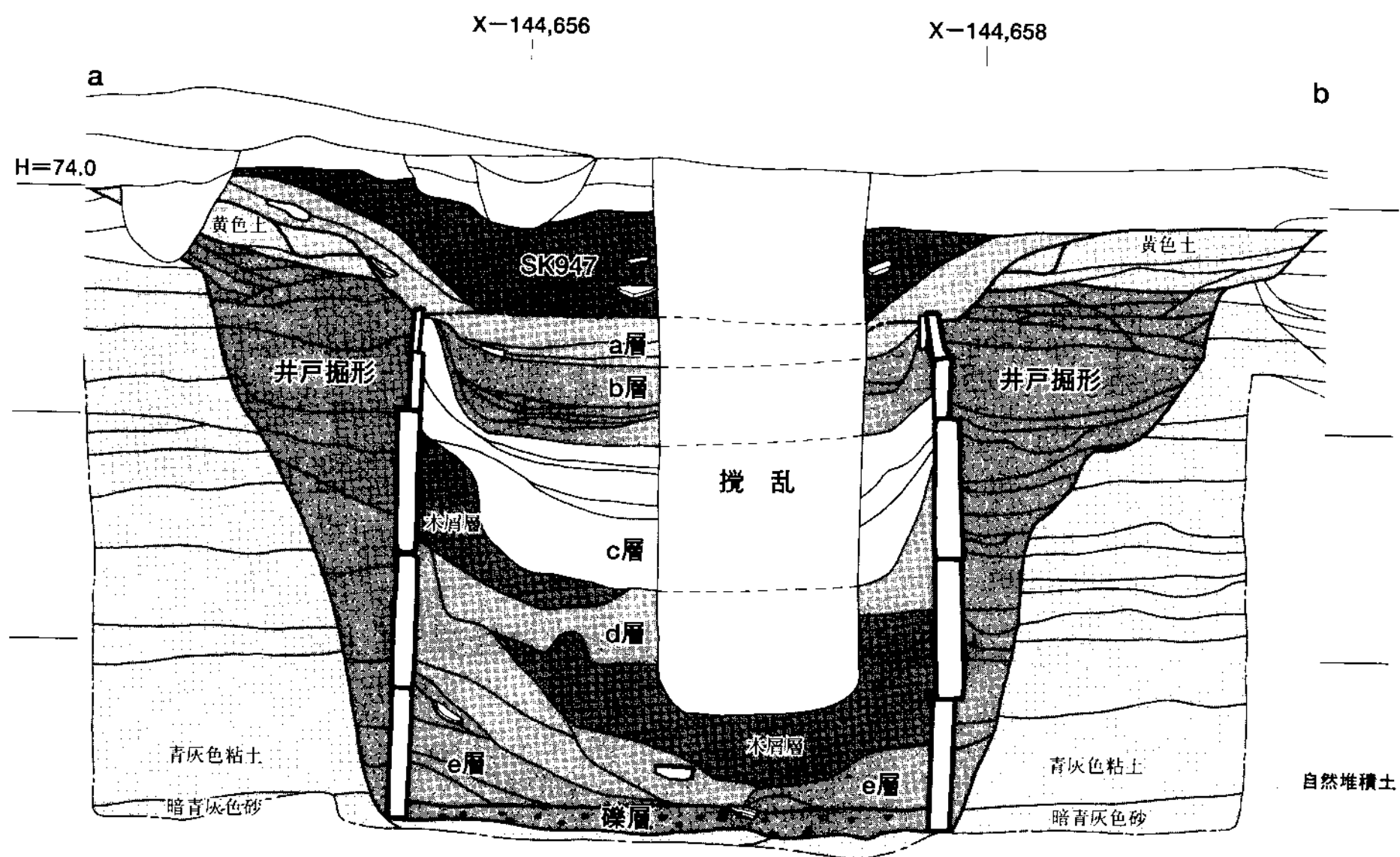
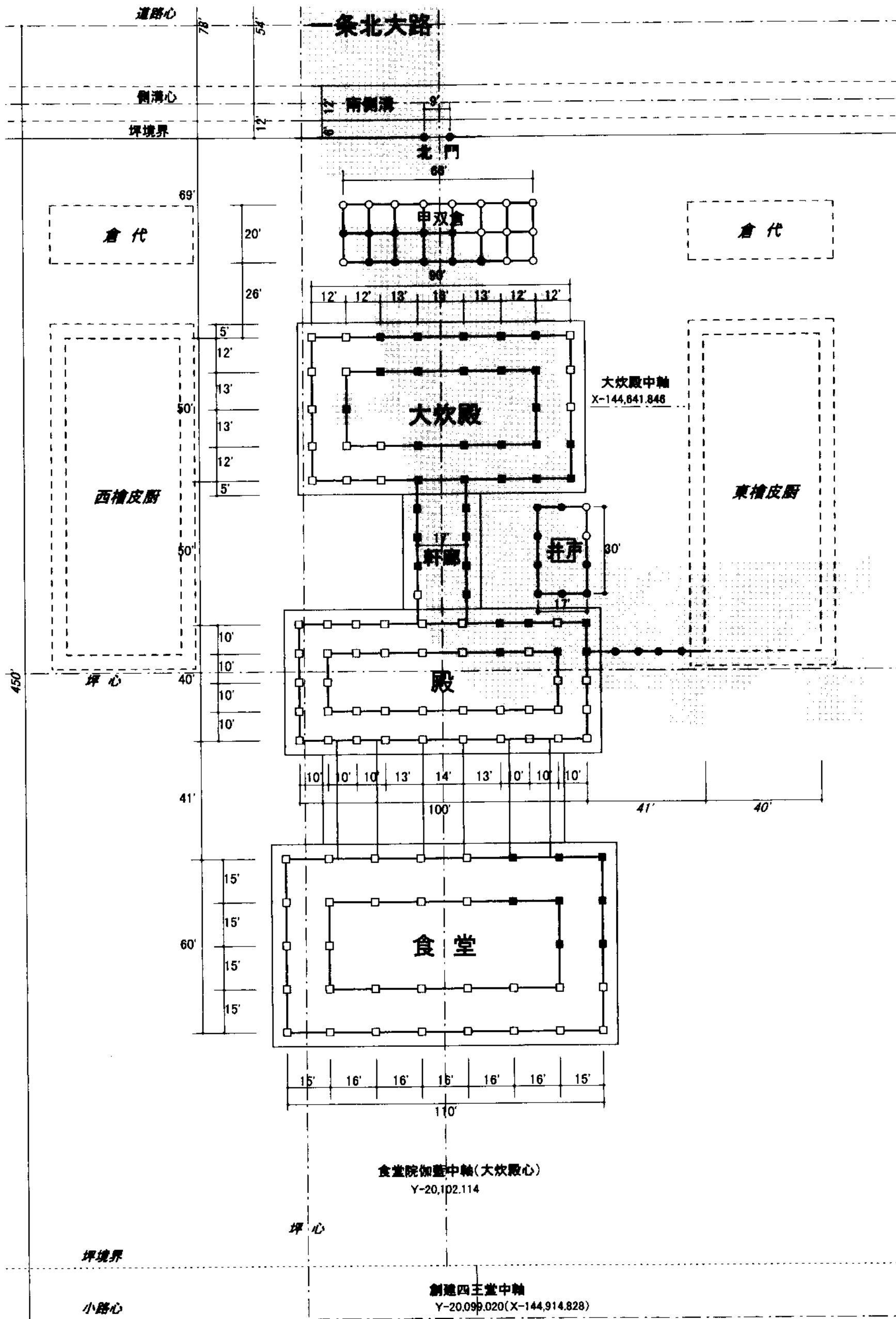


图10 SE950断面図 1:50



単位：1'=1尺 □：礎石建ち ○：掘立柱 黒塗は検出済 文字の斜体は推定を示す

図11 西大寺食堂院配置図 1:800

井戸内の遺物は、上からaからeまでの五層に分けて取り上げた。e層は灰色の粘質土で、瓦を含むが比較的遺物は少ない。d層は木屑の間層を多量に含み、遺物も多い。木簡の多くはこのd層から出土した。c、b、a層と徐々に埋土のしまりが悪くなり、木質遺物の量が減り、土器の量が増える。従って井戸が廃絶した後、食堂院で不要になったゴミが投棄され上部まで埋まったとみられる。珪藻分析によると、投棄の開始から終了までは数週間程度要したとみられる。井戸埋土の遺物は奈良時代末を下限とし、井戸は八世紀末に廃絶したとみられる。木簡の年記も現段階では延暦年間のものに限られる。また、井戸枠には樹皮が残っているものがあり、年輪年代測定によれば伐採時期は七六七年晩秋から七六八年早春にかけてと判断されている。

第四〇六次調査（6AAE・F区）

（二〇〇六年一月〜二〇〇七年五月）

県犬養門（東面中門）から西に伸びる道路遺構SF一五八〇より南で、かつ東院と東区朝堂院の間の区画（東方官衙地区と呼称する）の構造を把握するための調査である。調査区は東方官衙地区の北端で、南北一二一m、東西一〇一m（幅はそれぞれ六m）を設定した。調査面積は一二九六㎡である。検出した遺構は、築地回廊、掘立柱建物二棟、礎石建物五棟、築地塀三条、溝三条などである。

調査地一帯の中央には南北基幹排水路SD二七〇〇（東大溝）が

南流しているが、SD二七〇〇の東には東西約五〇m、南北一二〇mの区画があり、少なくとも二時期の変遷が考えられる。この区画は北端から五〇mの位置にある東西築地塀によって二分される。このうち南の区画は、北端に礎石建ち大型基壇建物（基壇高は少なくとも八〇cm、南北長一八・七m）を配し、その南に桁行一〇間以上の南北に長い礎石建ち基壇建物が対称にあったことを確認した。SD二七〇〇の西側では、二面廂をつけた梁行二間、桁行二間以上の礎石建ち南北棟建物が検出された。なおSD二七〇〇の両側は築地塀で囲まれていた。

このうち、木簡が出土したのはSD二七〇〇で、出土点数は四五三点である。溝幅は約三・二m、深さ約一・一mをはかる。西岸は木杭で護岸されており、裏込には瓦が詰められていた。東岸は素掘りのままである。溝の埋土は上中下の三層に分けられ、砂礫を主体としている。木簡は主に中層から下層にかけて出土した。なお、「主水司」の墨書土器が溝の中層から出土している。

それぞれの調査については、当該年度の『奈良文化財研究所紀要』を参照されたい。

二、凡例

(一) 木簡は内容により、文書、付札、その他の順に排列するのを原則とし、便宜的に通し番号を付した。

(二) 釈文の漢字は概ね現行常用字体に改めたが、「龍」「廣」「寶」「盡」「嶋」などについては右の字体を使用した。

(三) 釈文に加えた符号は次のとおりである。

- ・ 木簡の表裏に文字がある場合、その区別を示す。
- 木簡の上端もしくは下端に、孔が穿たれていることを示す。

……
同一木簡と推定されるが直接接続せず、中間の一字以上が不明なことを示す。

… …
木目と直交する方向の刻線が施されていることを示す。

□ □ □ □
欠損文字のうち字数の確認できるもの。

□ □ □ □
欠損文字のうち字数が数えられないもの。

□ □ □ □
記載内容から、上または下に一字以上の文字を推定した
もの。

■ ■ ■ ■
抹消により判読が困難なもの。

々 々
抹消部分の字画が明らかでない場合に限り、原字の左傍に付した。

〔×〕 文字の上に重書して原字を訂正している場合、訂正箇所

の左傍に・を付し、原字を上のを領で右傍に示した。

「」 異筆、追筆。

「」 合点。

〔 〕 校訂に関する註のうち本文に置き換わるべき文字を含むもの。

() 右以外の校訂註、および説明註。

カ 編者が加えた註で、疑問が残るもの。

マ、 文字に疑問はないが、意味が通じ難いもの。

(四) 釈文下の上段のアラビア数字は、木簡の長さ・幅・厚さを示す(単位はmm)。欠損・二次的整形の場合、現存部分の法量を括弧つきで示した。なお長さ・幅は木簡の文字の方向による。

(五) 釈文下の中段に現在の遺存の形態を示す型式番号を記した。

型式番号は次の通りで、四桁の数字を用いているが、本概報では時代を示す千の位を省き、下三桁の数字で表した。なお端とは、木簡を木目方向においた時の上下両端をいう。

6011型式 長方形の材のもの。

6015型式 長方形の材の側面に孔を穿ったもの。

6019型式 一端が方頭で、他端は折損・腐蝕などによって原形の失

われたもの。原形は6011・6015・6032・6041・6051型式のいずれかと推定される。

6021型式 小型矩形のもの。

6022型式 小型矩形の材の一端を圭頭にしたもの。

6031型式 長方形の材の両端の左右に切り込みを入れたもの方頭・圭頭など種々の作り方がある。

6032型式 長方形の材の一端の左右に切り込みを入れたもの。

6033型式 長方形の材の一端の左右に切り込みを入れ、他端を尖らせたもの。

6039型式 長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。原形は6031

・6032・6033・6043型式のいずれかと推定される。

6041型式 長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状に作ったもの。

6043型式 長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状にし、左右に切り込みをもつもの。

6049型式 長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状にしているが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。

6051型式 長方形の材の一端を尖らせたもの。

6059型式 長方形の材の一端を尖らせているが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。原形は6033・6051型式のいずれかと推定される。

6061型式 用途の明瞭な木製品に墨書のあるもの。()内に製品名を註記した。

6065型式 用途未詳の木製品に墨書のあるもの。

6081型式 折損・割截・腐蝕その他によって原形の判明しないもの。

6091型式 削屑。

括弧内の番号は二次的整形の場合に推定できる原形の型式を表す。

(六) 釈文下の下段に出土地点を示す小地区名(アルファベット・数字)を記した。Zは地区不明を示す。複数の地区から出土した破片が接続したものは地区名を併記した。

(七) 釈文の出土地点下に付した「*」印は、口絵図版に写真を掲げた木簡を示す。例えば「*」は「図版二」に対応する。

本書の作成は都城発掘調査部史料研究室が行った。木簡の釈読は、渡辺晃宏・馬場基・山本崇・浅野啓介があたった。編集に際しては、梅本有貴江・桑田訓也・小池綾子・清水絢子・杉本敬子・南島真理子各氏の協力を得た。写真は企画調整部写真室の中村一郎の撮影による。本書の編集は浅野啓介が担当した。

三、 积文

第三三八次調査 (6BYS区)

東西溝SD二七九〇

第七九一二四次調査 (6AGA区)

井戸SE八一〇 (2層)

1 〇 水船四枚切机四前中取一前

(174)・(20)・3 081 GD22

第三五二次調査 (6BGN区)

5 十 月八日

[供カ]

廿一ヶ度除

(318)・(37)・4 081 KT69

第三五二次調査 (6BGN区)
出土地不詳

第三三六次調査 (6BGN区)

池SG八三二一埋立土下層

2 〇 年生

62・21・7 011 CN37

6 〇 吉川房治郎

・ 〇 吉川 家

121・27・6 011 Z

青灰色粘土

3 四 調 新 日 七 三
月

21・275・11 061 (石盤の杵木) CN37

7 〇 藤三郎

・ 三

167・(27)・7 081 CH34

南北溝SD七八九八

4 〇 御笠
事務

450・168・10 011 C037

8 商店 電話二一四

(230)・(14)・3 061 (竹製のやつ) CD34

第三六三次調査 (6 B F O 区)

土坑 S K 八六五九

9 九月

六十三

四十八

荷

15 角行

中將

26・23・6 061 (将棋の駒) CJ40

16 角行

角行

29・25・4 061 (将棋の駒) CJ40

(155)・(75)・4 081 BB44

17 少將

少將

25・20・8 061 (将棋の駒) CJ40

(178)・(23)・2 081 BB45

第三七四次調査 (6 B G N 区)

水槽 S X 八八三八

18 大佐

大佐

23・20・3 061 (将棋の駒) CJ40

11 木

19 金將

26・24・2 061 (将棋の駒) CJ40

0

122・28・5 011 CJ40

20 金將

金將

26・24・4 061 (将棋の駒) CJ40

12 桉田

(140)・31・6 019 CJ40

中

13 稻

173・57・6 011 CJ40

21 金將

金將

26・(23)・5 061 (将棋の駒) CJ40

14 飛車

将力

佐力

25・(19)・3 061 (将棋の駒) CJ40

将力

28・25・9 061 (将棋の駒) CJ40

22 銀將

25・(19)・3 061 (将棋の駒) CJ40

23	少佐	25・(22)・4	061 (将棋の駒)	CJ40	31	□ [中力]	(10)・(14)・2	061 (将棋の駒)	CJ40
24	□ □ 少 [佐力]	(22)・20・5	061 (将棋の駒)	CJ40	埋甕遺構S X 八七九一				
25	□ □ [少佐力]	26・(14)・4	061 (将棋の駒)	CJ40	32	奈良県大□□□□奈良 [美力]			
26	□ □ [佐力]	25・(13)・4	061 (将棋の駒)	CJ40	第三八五次調査 (6 A C C 区)				
27	□ [尉力]	24・20・5	061 (将棋の駒)	CJ40	堆積土				
28	桂馬				33	□ □			140・42・4 011 PK30
	中尉	26・(20)・2	061 (将棋の駒)	CJ40	第三九〇次調査 (6 B G N 区)				
29	□ 中尉	23・19・3	061 (将棋の駒)	CJ40	水溜遺構S X 八九八六				
30	□ □ [香車力]	23・20・4	061 (将棋の駒)	CJ40	34	『大』『乘』 (烧印)			
						水溜『大』『乘』 (烧印)	(底板外面)		
						最大径1110(底板径960)・高(740)・81	061 (大型桶)	CC41	

第四〇四次調査 (6 B S D 区)
井戸 S E 九五〇

- 35 東菌進上瓜伍拾壹果 又木瓜拾丸 大角豆十把
茄子壹斗貳升 七月廿四日
別□□□□ [当力]
299・37・4 011 IC70 p *1
- 36 東菌進上大根三升 知佐二升
(232)・(9+7)・3 081 IC70 p *2
- 37 □ □八□ 付淨女 進上七月廿三日□□
(176)・25・2 011 IC70 p *3
- 38 五拾把 七月十日僧信梵判収目代安豊
(245)・22・3 019 IC70 p *2
- 39 又進四車 一車十一村 [合カ]
二車別十村 □卍村 十月十九日藏卍恵智
一車九村
282・32・4 011 IC70 p *1
- 40 飯壹升 伊賀栗拾使間食料 八月廿七日 目代□□ [倉 人カ]
[□□□□□□□□] 八月四日□□ [目カ]
上座 寺主 可信 □□□□□□ 倉人
(裏面左行ハ墨線デ囲ンデ抹消)
395・25・6 011 IC70 p *1
- 41 飯貳升 客房侍倉人一人 鑑取一人 合二人間食料 [那カ] 三月五日
寺主□□□□都□[聞圓] 少都□□
・ 銭□貫文 少寺主
[□□□□] 而□□□□□□
291・42・2 011 IC70 p *6
- 42 飯壹斗壹升 蔓菁洗漬並□
上座 寺主「信如」可信
(180)・41・3 019 IC70 p *2
- 43 十日朝參 頭一人 多守師 多表師 慈舜師
・ 慈師 保忠師 别当守泰
・ 飯壹升 雜□□常料 十一月四日
寺主 [□□□□□□□□] [可信カ]
226・26・1 011 IC70 p *7

- 57 ○西南□殿鑑 112.31.6 061 (キーホルダー) IC70 d *4
- 58 ・羽郡野田郷戸主□□私人戸口生江伊加万呂
 ・延曆五年十月廿七日 142.18.3 051 IC70 e *3
- 59 ・西大赤江南庄黒米五斗吉万呂
 ・正曆十一年六月十五日吉万呂
 [延] 156.21.4 051 IC70 d *3
- 60 [西大赤江カ]
 ・□□南庄黒米五斗
 [十年カ] [万呂カ]
 ・延曆□□十二月廿日□□□□ 175.16.4 051 IC70 d *4
- 61 ・穴太加比万呂黒米五斗
 [西大寺カ]
 ・□□赤江北庄延曆十一年地子 108.14.2 051 IB70 d *4
- 62 ・□万呂黒米五斗西大寺
 ・赤江北庄延曆十一年地子 147.16.6 051 IC70 d *4
- 63 ・西大□
 ・延曆□□ (44)・17.5 019 IC70 d *7
- 64 少戸主波太部直万呂大豆五斗 162.13.5 051 IB70 d *3
- 65 少戸主□□□□紀須大豆五斗 (195)・16.3 033 IC70 d
- 66 少戸主波太部直万呂□豆 (111)・22.4 039 IC70 d *2
- 67 少波太部直万呂 154.12.4 051 IC70 d
- 68 少□□部廣□大□ 97.16.5 051 IC70 d
- 69 美作国勝田郡吉野郷□米五斗 [搗カ] 171.29.6 032 IB70 d *5
- 70 川合郷茜庭刀自女 144.18.3 051 IC70 e *3
- 71 ・佐々貴山公時守戸白米
 ・□□成乎智廣□□ (127)・24.3 019 IC70 d *7
- 72 ・矢田部廣人米五斗
 ・上二月十八日 199.27.3 051 IC70 d *5
- 73 楯田部由万呂□五斗 [赤カ] 94.11.4 011 IB70 e *2

74	繩万呂□五斗	117.24.3	051	IC70	P	84	五斗一升	84.18.3	051	IB70	P
							□□□□				
75	〔夾力〕 □角豆二百五十二枝 ・三中取	134.10.4	051	IC70	P *4	85	五斗一升	153.17.4	051	IB70	e
76	醬漬瓜六斗	132.18.2	033	IC70	P *2	86	五斗一升	153.25.3	051	IC70	P
77	五斗八□	147.31.5	051	IC70	P	87	四斗八升	166.19.6	051	IC70	P
78	五斗一升六合	96.20.3	051	IB70	P *2	88	四斗六升	110.13.3	051	IB70	P
79	五斗一升六合	97.17.2	051	IB70	P	89	四斗六升	134.15.4	051	IC70	P
80	五斗一升六合	108.16.4	051	IB70	P *2	90	四斗六升				
							□□□□				
81	五斗一升六合	110.14.2	051	IC70	P		□□□□				
82	五斗一升四合	125.16.2	051	IB70	P	91	四斗六升	176.25.5	051	IC70	e
83	五斗一升三合	123.19.5	051	IC70	P		□□□□				
							□□□□	146.21.4	051	IC70	P *5

92 射替料 甲代 表伍斜
 表替 表替
 甲表 表
 〔替力〕
 (40)・(187)・6 081 IC70

93 成成式式式商商式 朝堂 成成 成式式
 〔海力〕 足

 312・21・4 011 IC70 p

94 同法 径140・厚6 061 (曲物底板) IB70 p *5

95 西南角 西大寺 名
 〔楼力〕
 2665・265・65 061 (井戸枠北四段目外側) IC70 *6

第四〇六次調査 (6AAF区)
 溝SD二七〇〇

96 左弁官 宣 〔口力〕 〔聴〕 又大輔宣御在所南 受大蔵 〔横材〕
 〔天地逆〕 (天地逆)
 〔横材〕 (横材)
 358・(23)・4 081 KP42 *6

97 右大舎人寮 〔大力〕
 (101)・(12)・2 081 K043 *7

98 謹解
 〔藁徳嶋若何廣〕
 (197)・(21)・5 081 KP42

99 少進
 月十六日
 (60)・(16)・3 081 KP43

100

 (243)・(8)・5 081 KP42

101 〔陸拾式力〕
 〔式拾力〕
 (122)・(9)・8 081 K043

102 少主鑑 (67)・(12)・5 081 KP42 *7

103 茎折稻 92・24・3 032 KP42 *7

104
 長
 〔柱廿三根力〕
 091 KP42 *7

105 官

091 KP42

106 麻
□

091 KP42

107 [右カ]
□三村

091 KP42

108 大大

091 KP42

109 [二日六カ]
□□□十六

091 KP42

110 虫麻呂

091 K042

111 □□田□内炙
□

091 K042 *7

112 □□宿
□□宿

091 K042

113 留部

091 K043

釈文補訂

A 平二―二一七六

・淡路国三原郡阿麻郷戸主海部□麻呂戸口同姓嶋万呂調塩三斗
□ 平寶字五年十月四日

342・30・11 033

E 城二―一八下

・主殿寮 召殿部 車持豊足 右人
但馬国美伎郡□□郷
・右件殿部等以今月七日寮庭参向
天平八年三月三日付
若過科重罪
□□從五位上川辺朝臣知万呂

280・38・5 011 *8

B 城六―一五上

・玉尔有皮手尔麻伎母知而伊□

□□皮伊加爾□〔加力〕

(136)・22・2 019 *8

F 城二―四―二九下

播磨国賀古郡淡葉郷須□里曾祢部石村御調御贄〔大鮪六斤太〕
〔保力〕

293・22・5 031

C 城一―五―一八下

・播磨国賀茂郡椅鹿郷錢一貫

・国廣山

(156)・22・5 039 *8

G 城三―四―三一下

・播磨国鴨郡
・許世部破六斗

(117)・25・4 039 *8

D 城一―六―一六下

〔土左力〕

□□国安藝郡□□年魚二斗七升

(124)・20・4 032 *8

『平城宮木簡一』 釈文補訂四

四二・近江国高嶋木津道守臣大父万呂
・ 白米 (216)・24・3 051 *9

四〇二 常陸国那賀郡酒烈埼所生若海藻 221・23・3 031 *9

四三・邑久郷官交易大麦五斗
・ □□ □ 170・27・8 033

四〇六・武蔵国秩父郡大贄鼓一斗

・ 天平十七年□ □ 145・21・3 032

四〇〇 伊豆国田方郡棄妾郷戸主□□
〔宋力〕 □□人□〔宋部力〕 (161)・28・5 039

四〇八 〔答力〕 □志郡和具郷伊祇須 (119)・20・5 051

四三二・□郡□津郷□□□□小□郷□
〔八力〕 天平十□年十一月 (134)・9・5 081

四一〇・□□□□海藻 御贄一籠
〔般進上若力〕 天平十九年二月 日力
□□□□□□□□□□ (234)・(12)・3 081

四三五 〔紀力〕 □伊国牟婁郡牟婁□ □□□□ □□□□果十
□□□□□□□□□□ 天平十七年十月 221・28・6 032 *9

四三 〔阿力〕 □波国那賀郡林郷白米五斗
・ □□俵 (150)・19・6 081

四三六・尾張国智□
〔天平六年力〕 □□□□ (208)・41・7 039 *9

四二五十四九

〔郡力〕 □朝夷郷石部衣万呂五斗
・ □月廿四日 (131)・23・6 059 *9
四三七・□国大嶋□□郷□□ □□□□
〔郡美敢力〕 天平十七年 (204)・26・6 051

四六 伊豆国賀茂郡色日郷戸主平群□□

(187)・29・5 039

四五三・□目驛戸漢人小弓戸

□□□□

(158)・25・3 019 *10

四三 国射水郡□□
〔旧力〕

(73)・20・4 081

四六四 上呉桃一斗
〔山力〕

131・21・5 033 *9

四四三 美作国勝田郡中男力
□□□□□□□□□□

(89)・(8)・5 039

四六五 搗香櫃

41・24・4 022 *10

〔前国 郡力〕

四四四 備□□□□□□□上郷戸主海部三□□戸口

□□ 249・29・5 033

四七三 御取鯨□□
〔卅烈力〕

155・18・4 033 *10

四七四 滓漬□□一罍 天平十五年四月

149・20・4 032 *10

四四五 麻生割鯨二籠

208・(21)・4 032 *10

四七六 美□呂

〔五力〕

・天平十八年□月廿□日

52・20・4 022

・諸人

(45)・(13)・4 039

四九二 受四斗四升

138・24・3 032 *10

四五〇 飢富郷

(114)・24・4 059

四九三 出□子□□□

・天平十□年六月廿四日□

141・24・4 032

四五二 天平□□□□三
月廿□□□

〔年力〕
〔日力〕

132・29・4 032 *10

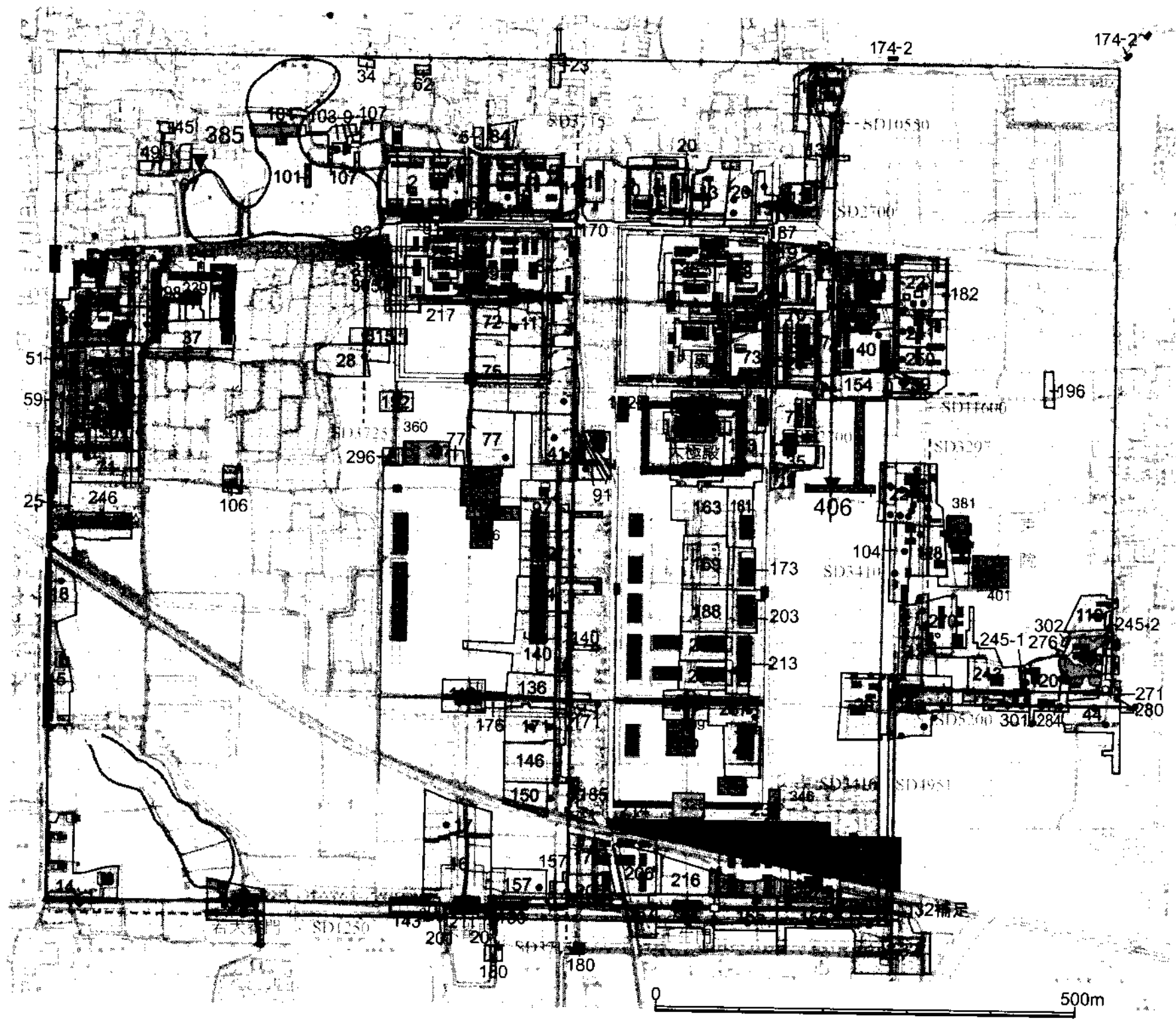
五〇〇（浅緑糸）・五三〇（取色）・五二六（黒緑東絶）・五三三（浅緑絶）は、この順（但し、五三三のみ表裏逆）で縦に接続する。また、四九六（中緑糸）・五〇九（縹生染）もこの順で接続する。長い材を切断分割して材を調整し、それぞれに文字を記載している。木簡の作成過程がわかる好例である（別木簡として扱うのは従来通りで変更なし）。

五二八・六度進上二十□□

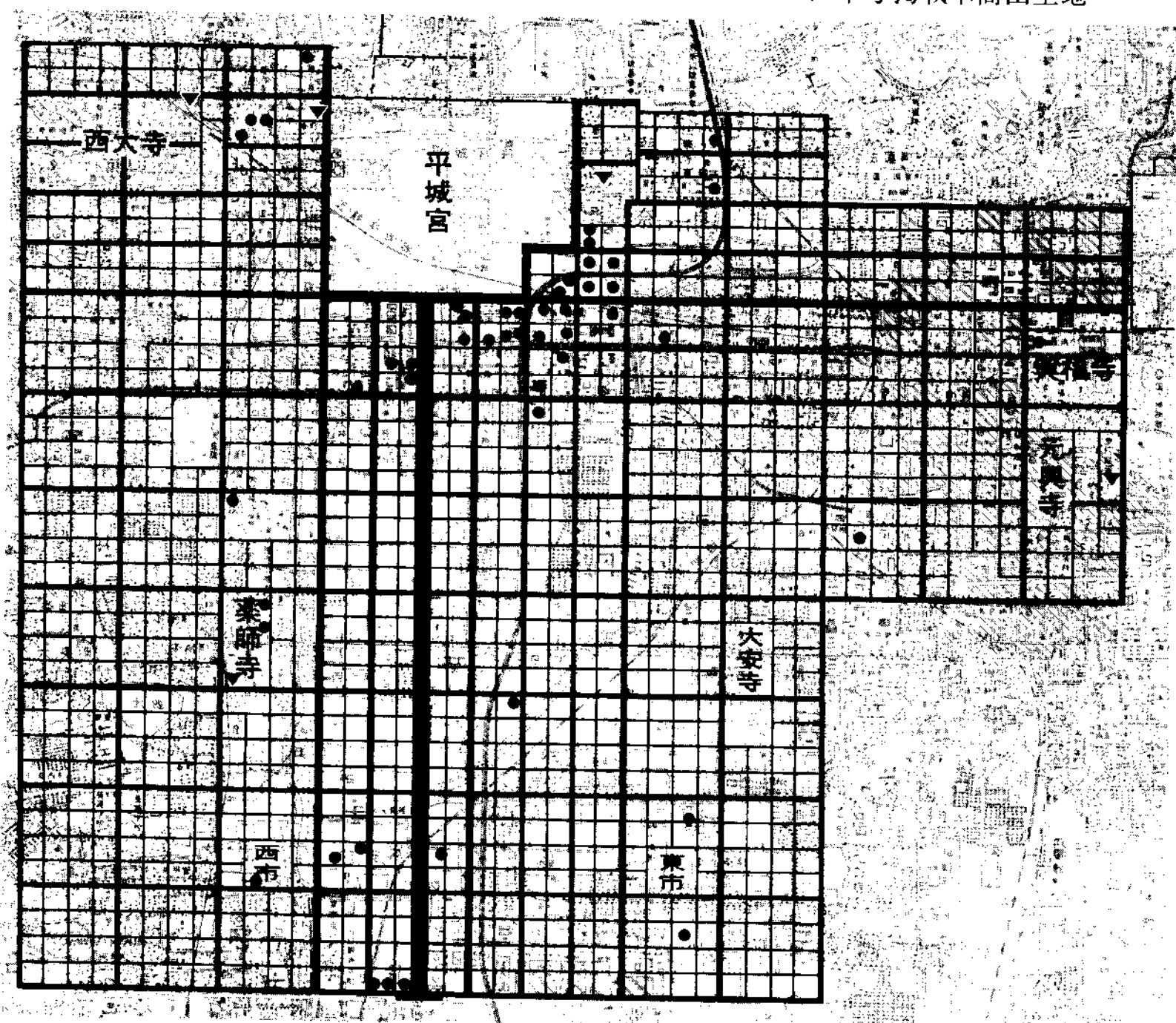
〔大カ〕

□ □ 付人□□

(91)・(22)・2 081



平城宮木簡出土地点図 ● 木簡出土地 ▼ 本号掲載木簡出土地



平城京木簡出土地点図 ● 木簡出土地 ▼ 本号掲載木簡出土地

二〇〇七年十一月二五日印刷
二〇〇七年十一月三〇日発行

平城宮発掘調査出土木簡概報（三十八）

編集・発行 独立行政法人国立文化財機構

奈良文化財研究所

〒六三〇―八五七七
奈良市二条町二―九―一

TEL 〇七四二―三〇―六八三七
FAX 〇七四二―三〇―六八三〇